
ターニングポイント

相沢敏

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ターニングポイント

【Nコード】

N7448B

【作者名】

相沢敏

【あらすじ】

人生の転機。それは人生の中で経験する人が多い出来事の事を言う。平凡で普通でツッコミ担当だった高校生。創野はある日の学校からの帰り道で少女と出会ってしまった事が人生の転機だった。現代日本のある高校と街を舞台に二人が織り成す学園コメディここに開幕。

第1話「序章／プロローグ」

「お、お前一体何者だよ!？」

「何って・・・俺はただの高校生」

「お前にはきいとらん!！」

あ。そうですか。

「・・・」

「こついつ時は自己紹介するもんなんだぞ」

「・・・河上舞衣^{かわかみまい}」

「誰も自己紹介しろとはいつとらん!！」

「あ、すいません。俺が言いました」

「くそ舐めやがって!！」

目の前にいる男。そうだな強盗犯Cはいきり立って何処から見ても美少女。河上舞衣に襲い掛かるのであった。

「ご愁傷さまだな。」

襲い掛かってきた強盗犯Cに舞衣の鋭い右ストレートが決まる。

男はまるで紙屑かボロ雑巾のように空中を舞い、店の床に沈んだ。

まずは何も理解できていない人のために、説明をしよう。この日は俺達の通っている高校の行事その名も「遠足」と言う。

遠足とは一日の授業が全く無く遊べると言う全く持って素晴らしい行事だ。なんでそんな行事があるかといえば、修学旅行でいなくなった三年がいらない為にそんな行事があるのだ。

高校の修学旅行って普通二年じゃないの？ と疑問に思った方。忘れる。三年とした方が色々都合がいいのさ。

で、その遠足の日にだな。遠足で訪れた水族館の中にある喫茶店に立ち寄った所、強盗が入ってきたと言う事さ。

それで、俺の隣にいる正義の味方。スーパー高校生。武道の達人などなど通り名が数多くある美少女こそ河上舞衣。一見ただの美少女高校生だが、日夜犯罪者達と戦っている正義のヒーローなのだ。

ターニングポイント

でも、真面目に犯罪者と戦ってる所なんてのを見たのはかなり久しぶりな気がするぞ、おい。

と言う訳で、説明は終わり。なんでもこの話のタイトル「ターニングポイント」だって？ 人生の転機なんて訪れたら、傍迷惑なだけさ。

って！！ プロローグ終わり？ 短すぎるだろ！

第1話「序章〜プロローグ〜」（後書き）

短い序章ではありますが、どうか続きもお読み下さい。そして感想や評価などをくださいましたら、感激です。どうか宜しくお願いします。

ターニングポイント

第2話「爆弾処理班と出会い」

さて、日本の普通で平凡な高校生が学校帰りに。ああ、死ぬかもしれないがこのやろう。と思う確率とはどれくらいの可能性なのだろう。

別に俺が戦隊レッドとか秘密組織の構成員とかどつかの軍のエアパイロットなんてことは無いからな。普通で平凡でナチュラルないち高校生だからな。

さあ、答える奴がいたら答えてみる。

適当に運命論なんか説きやがったら、ディステイニーの名の元に地面の下に埋めてやるからな。

最初から凄じ始まり方だと思っただろうが、俺の遭遇している事態の方が凄まじいぞ。

なんせ、学校帰りに熊と遭遇してるのだからな。

熊と睨めっこなんて人生の中でもかなり貴重な体験だと思うぞ。

まあ生きていければの話だが。

もしこの先そんな経験があれば、こうして熊と睨めっこをすればいいのさ、先に動いた方が負けなんだ。

「おいしい！！ 言ってる側から動いちゃったよ！ こっち向かってくるよこの森の熊さん！ 負けだぞ、負けていいのか!？」

どれほどの反射神経があれば熊の爪から逃れられるのだろうか、おそらく時速にしてマツハの速さのボールを避けられるほどなら絶対に避けられるだろう。

なら、俺がそれほどの反射神経があるのかと問われればその答えは、保留しておこう。

聞こえたのは爆竹が爆発したかのような音が聞こえた。その後、熊が倒れる。

必然的というのか、俺は後ろを振り向く。猟友会のおっさんが立っているのかと思っただが、予想を大きく裏切る人物がたっていた。

夏も近いというのにコートを着込み、その手にライフルを構えている。少女の姿が目飛び込んできた。

それもどれくらい美人だった。

あまりにもアンバランスすぎる。夏も近いのにコートを着込みライフルを構え熊を撃ち抜く美少女。まさかこれは……。

「映画の撮影か!？」

「目標達成。目撃者一。コードC」

無線のような物をポケットから取り出して、それに向かって映画で聞くような業界用語を言う。

少しくらい俺に何か言っただけいいものだ。こらそこ慰めの言葉はいらぬぞ。

「あっ、おい!」

踵を返して歩き出した少女を俺は呼び止めていた。

振り返った少女の瞳を見た時。俺は目は口ほどに物を言う。という諺を思い出した。まるで他人には気を許さない猛獣の様な雰囲気。冷たくて冷酷な瞳。

ちょっと怖い。

「あ、えつと。その、ありがとう」

「……」

「君は？」

「……どうして感謝するの?」

「どうしてって」

さて、どうしてだろう。命を助けてもらったからだと思うが。命の恩人に感謝するのはごく当たり前のことではないだろうか。

という事を俺は目の前にいる少女に言ってみた。

「……そう」

それだけを言い残し少女は後ろを向き歩き出した。俺は少女の背中を見つめながらその場に立ち尽くしていた。

そんな俺の肩を誰かが叩いた。

「熊が!! 熊が地獄の底から蘇った!!」

「あはは、僕は熊かい？」

振り返るとそこには熊ではなく二十代くらいの若い男が立っていた。

その男は柳井拓郎やないたくろうと自己紹介をした。聞くところによると、柳井さんは警察の人で、俺はその人の車で家まで送り届けられた。

翌日の朝のニュースを見ながら俺は食パンを食べていた。チャンネルを回せど回せど、何処にも昨日の事件なんか報道していない。

誰も死傷者が出ていない事件なんて、取るに足らない小さな事だとしても言うのかニュース番組め。今日から毎日無言電話百回ほどするぞ。

「さつきからチャンネル回すから、全然ニュース見れないんですけど?」

「むっ。普段全然ニュースを見ないお前がそんな事をほざくとは、恐らく現社の・・・」

「そこまで分かってるんだったら、チャンネル止める!」
「はいはい。全くこいつは兄貴の事を何だと思ってるんだらうなあ。

「ただのパシリ」

「酷いなあ、俺が優しい兄貴で助かったなあ」

妹が可愛いと思えるのは、小学校低学年位までだな、それ以降になると兄貴を何とも思わずパシリ呼ばわりするんだからな。

「そつえば、あんた」

「兄貴をあんた呼ばわりか!

「自転車どうしたの?」

「何を言っんだい。僕の自転車ならいつもの車庫に」

「無いから聞いてんでしょ」

「はっ!?!」

家の隣の自動車を入れる車庫にいつも自転車を収納しているが、その場所には妹の自転車しかなかった。

WAY? 何故。

「昨日どうやって帰ってきたんだっけ?」

「私に聞かないでよ」

ああ。そうかそうか。柳井さんの車で帰ってきたんだ。とすると自転車は学校と家との丁度中間地点にあることになる。

「じゃあ、せいぜい頑張つて遅刻しないようにしなさい」

「おいこら！　せめてかばんだけでも持って行ってくれえ！！」

全く無情な奴である。その日は俺の健闘空しく遅刻した事は言うまでもない。

ここで弁明しておこう。本来なら遅刻するはずではなかったのだ。あそこであの場所に自転車が転がってれば遅刻なんかしなかった。恐らく警察がレッカーしたのではなからうか。

という訳で警察署に自転車でもとりに行かなければいけない。

「という訳で、出てけ」

「どんな訳だ」

「大体にして、ここをお前達の拠点にしているお前が間違っている」
「こことは高校の校舎内の生徒会室である。」

「別にいい、お前が会長なわけだし。今日は定例会もないんだろうし」

生徒会会長というのはこの俺。おい誰だ、似合わないとかしんじられなくいか言つたのは。

「お前の部は学校側から正式に認知されていないんだぞ」

「だから部室が無いからここを部室にしてるんだろ。というかお前も我が部の部員だろう」

「知らん。お前の意味不明な部に入部した覚えは無い」

「前から探偵事務所だと言ってるだろう」

「知らん」

日々日頃から学校内で殺人事件を待ち望んでいる危ない男、その名は倉田和也くわいたかずやと言つ。

極度のミステリーマニアで、自分をシャーロックホームズか何かの生まれ変わりだと信じて止まない恐ろしい男だ。

「今日は警察署にこれから行かないと駄目なんだよ」

「警察署？ 何をしたのかね殺人か？」

しまった。つい口を滑らせてしまった。

うるさく尋問をしてくる和也を生徒会室から叩き出して、施錠をし学校を後にする。

「自転車はごさいません」

「少し途中の説明省きすぎじゃないのか、いきなり警察署かよ」

「はっ？」

「こつちの話です。それよりも。昨日の熊に襲われた場所の近くに自転車を置いてきたんですよ、警察の人が持ってたんじゃないのですか」

その時まで賑やかだった受付の周りが急に静かになる。仕事をしていた警察の人がわざわざ手を止めて、俺を見ている。

凄く怖い。

「あ、あの。自転車はごさいませんのでお帰りください」

「は、はあ……」

周りの雰囲気にも気圧されて、俺は警察署から出る。

何だっただらう、あの空気。

家に帰ってからも考え続け、次の日になっても考え続け、登校中にもマラソンに励みながら考え続け、学校に着いてからも考え続けていた。

だから、いつもの学校とは明らかに変わっている異変にも気づかなかつたのだらう。

いつもの教室には誰の姿も無かつた。いや、学校に入ってきてここまでする最中にも誰ともすれ違っていなかつた。

「まさか……」

今日って朝例会だったのか！ ぬかつた！ それならいつもより五分は早く来ないと遅刻じゃないか。

「はは……あはは」

誰もいないのに自分の失敗を誤魔化すように笑ってみる。

「……動くな」

はい？ いきなり後ろから声掛けられて、後頭部になんかゴツゴツしたものの当てられてるんですけど。しかも何処かで聞いたような声だ。

「・・・全員が避難したあとで仕掛ける手口か？」

仕掛ける？ 何を？

「誰？」

「俺はこの学校の生徒だ」

後ろの何者かがポケットから何かを取り出すかのような雰囲気。というか気配。というか音。

今だ。

俺は素早く上半身を曲げて、床に転がっていた黒板用長い定規を掴み。振り向きざまにその定規を振り回す。

定規は虚しく空気を切っただけだった。後ろには誰もいない。ただ廊下の壁があるだけだ。

「いない・・・？」

「・・・動くな」

「・・・」

俺は本当に恐怖しかけていた。定規を掴もうと上半身を曲げる前までは確かに後ろに居たはずだ。それがどうして今後ろにいるんだ。後ろを振り返った俺の目に飛び込んできたのは、一昨日の光景。夏も近いと言うのにコートを着込み、左手で俺に向かって銃を構えている。

「君は・・・一昨日の」

「・・・」

少女は無言で携帯電話を差し出してくる。まるでこれに出ろ。とでも言いたげだ。

俺はおっかなびつくり少女の手から携帯電話を受け取った。

「はい・・・？」

「創野か？」

創野そらのというのは俺の苗字。

「そうですね、あなたは？」

「昨日会っただろ？ 柳井だよ。柳井拓郎」

「ああ、そういえば会った気がするが、確かあれは一昨日だったようなな。」

「いいか、落ち着いてよく聞けよ。その学校内に爆弾が仕掛けられている可能性がある」

「はあ……な、なんですとお！！！」

「事前に警察に連絡をよこすような犯人だったからな。万が一に備えて、生徒を全員避難させておいたんだ。にも関わらず舞衣から生徒が一人残つてると言われたときには驚いたぞ。まさか君だとは思わなかったんだがな」

「目の前にいる少女はどうやら”まい”という名前らしい。漢字は分からんが。」

「舞うのまに衣服のいだ」

「なんであなたが説明してんですか」

「まあ、それよりもだ。一つ頼みたい事がある」

「頼みたい事？ 嫌な予感。何か命の危険性が伴っているような。」

「舞衣と爆弾を探してもらえるかい？ いくら舞衣でもそのでかい高校内全部を時間内に探すのは厳しいんだ」

「時間つて？」

「犯人の爆破予告まであと三十分だ」

「三十分つていくらなんでも時間なさすぎだろ！！」

「他に人手はいないんですか！？」

「いないんだ、すまん頑張ってくれ」

「おいしい！ まだ手伝うって返事してないよ！？ ねえちょっと

おお！！！」

「……あなたはA棟と体育館を他は私が調べる。爆弾を見つけたらこの携帯で連絡して」

「あ、ちよつと舞衣！……さん」

もういなかった。まああれだ。逃げちゃおうかな。

タイムリミットまで後二十五分。

「ぬおおお！！ どうして俺は逃げもせずA棟の教室を全部探し回ってるんだろうな、答えを教えてください人がいたら誰か教えて！ 大体にしてこういうことは推理オタクもといミステリーオタクの和也にでも頼めばいいんだよ！」

あ、そっかあいつを巻き込めばいいんだ。電話しよ。

「お前今何処にいるんだ！？」

「何処って自宅だが？」

「おいしい！ なんで学校登校してないの！？」

「まさか、登校はしたさ。爆弾が仕掛けられてるといっているので危ないから家に帰ったまでの事」

「帰ったまでの事。じゃねええ！！ 普通こういう時こそ、自称探偵のお前が爆弾を見つけてるだろうが！！ あの有名な子供のヒーローな探偵も自分で爆弾解体してるんだぞ！！」

「誰のことか知らんな。お前も学校にいるのだったら、爆発して死ぬぞじゃあな」

切りやがった。あの野郎め今日から毎日無言電話百回するから覚悟しとけ！！

A棟の教室やトイレを全部調べたが、爆発物なんてありやしない。となると体育館に行かないとな。

てか、あと何分だよ。

「あと五分！？ ねえあと五分しかないのおにいさあん！！」

A棟の一階まで降り切って俺は自分の犯した重大なミスに気がついた。気がつかなきやいいのに。

なんと屋上に行ってなかったのだ。残り時間四分屋上をとるか体育館を取るか。

どっちなんだ！！

「逃げるに決まってんだろ、この野郎！」

下駄箱へと駆け出した俺がその目で目撃したのは、廊下の向こう側から舞衣・・・さんが何か四角い箱のような物持って歩いてくる

光景だった。

「……」

「いや、これどうしようって様な目で見られても……」

「……これで撃ち抜く？」

「爆発するだろうが!!!」

見たところそんな大きな爆弾ではなかった。それに持ち運んでも大丈夫のようだから、恐らく火薬の量は少量で威力もそんなに大きくないはずだ。

「屋上に行くぞ!」

考えが一つだけあった。屋上なら、それが出来る。

俺は屋上まで一気に駆け上がると、問題の爆弾を大空向かって投げ飛ばした。

俺のボール投げの飛距離は二百メートル(もちろんうそ)一番高い場所で爆弾を撃ち抜けば被害は出ないはずだ。

「今だ! 爆弾を撃て!」

「分かった」

「……」

ん? 分かったと言った割には、どうして撃たないんだ。不安になつて後ろを振り向いた俺の目に飛び込んできたのは。

一話目にしてこの描写何回目だよ、おい。

「おいしい!!! なあにそれ、なあなのそれ!? なんで野球のユニフォームに帽子にバットなの!? しかもなんでそれ構えているの!?!」

「……引き付けて打ち抜く」

誰も野球のバッターの打ち方を言えなんて言ってないよ!? 爆弾に強い衝撃与えたら……。

「はあっ!」

衝撃与えたらあ!!!

「爆発するだろうがあ!!!」

俺が叫ぶとともに、爆弾は大空高く舞い上がって。爆発した。

ターニングポイント

やれやれでたらめな事だ。

第3話「伏線とは時として消したりします」サブタイトル長っ」

怪奇！ 爆弾空中爆発！！ 校庭にいた生徒の証言では屋上から野球の話がどうか・・・。

そんな見出しが新聞の一面を飾ったのは、あの事件があった次の日である。

無情なことに学校側は犯人も捕まったことだし、休みしなくてもいいでしょう。みたいなノリで今日もまた普通に学校がある。

「高校も酷いものね、あんな事があった生徒の精神的苦痛をこれっぽっちも知らないんだから」

「お前の口から精神的苦痛なんて言葉が出るとは、今日辺り雪降るな。赤い」

「その雪をあなたの血で染色してやろうかしら？」
ほらな。凶暴凶悪限りない。

世の学生諸君。妹が欲しいんだと思ってる奴。こいつを引き取らせてやる。一分で後悔するからな保証書付だぞ。

俺は朝食を食べ終わると、家から出て車庫に収納してあるマイバイク（自転車）にまたがり颯爽と走り出す。

ああ、ちなみに俺の自転車を持っていったのは警察ではなく柳井さんのお仲間の加藤と言う人だったらしい。ちなみに柳井さんも警察の人ではなかった。

その辺の説明はめんどくさいので、ストーリーの途中辺りにでも出てくると思うので今はしない。

学校の自転車置き場にマイバイクを止め、教室へと向かう。途中何人かの後輩から挨拶をされ、さわやかに挨拶を返す。

そこ。気持ち悪いと言わない。

「よぉ〜昨日は災難だったな」

「やめてくれ、昨日の事は思い出したくない」

思い出すだけでも残酷な記憶なのだよ。沢田少年。

「というか、創野お前昨日いたか？」

と俺の昨日の俺の存在を疑っているのは高園少年。二人合わせて田園都市というコンビ名なのだ。

「俺は高野だつつの！ た・か・の！」

「たかその。の方が面白いぞ。二人揃って田園！ ってヒットするかもよ」

「するか！」

と沢田、高野両名には不人気な仇名なのだ。俺が折角六十五秒も掛けて考えてやった仇名だったのに全くもつ。

「それよりも、聞いたかよ？ 創野」

「うちのクラスの行き過ぎた変態が捕まった事なら一年前に聞いた」
「んなの誰でも知ってるだろ。転校生だよ転校生」

全く今時の高校生ついたら転校生くらいでギャーギャー騒ぐもんなんだよ、つたく転校生の一人や二人三人や四人や六人なんか普通だろう。

「何処の学校が一年間に六人も転校生来るんだよ」と高野。

「俺が朝校長室の前通つたら、聞こえて来たんだって。転校生の話が。しかもな女だぜ女」

と沢田。

「ふ〜ん。まあ男だつたらお前等は騒がないわな」

「あつたりまえだろ」

二人の声が見事に重なる息ピッタリ。やっぱりお前等二人揃って田園都市な。

「どうして、女だと断定できるんだよ？」

近くの席の奴が話を聞いていたのか聞いてくる。ちなみに奴の名前は斉藤だ。

「名前を聞いたんだよ。河上舞衣かわかみまいって女しかいないだろ」

それとだな、名前の説明について沢田にしる高野にしる斉藤にしる苗字しか出ていない。これはあまり大した役目の奴ではないと言

う事さ。

言うなればゲストキャラだな。

あれ？ そういえば俺も苗字だけだよな？ あれ、これって俺が主人公じゃないの！？ 主人公俺だよ！！ 俺！

「おい、沢田お前今何て言った？」

「だから、河上舞衣なんて名前は女以外ないだろう」

河上舞衣か。そういえばあの少女も舞衣って名前なんだよな。今こうしている間にもあの少女は犯罪者達を追っているのだろうか。

チャイムが鳴り、担任が教室に入ってくる。

「起立！ 礼」

学級委員が号令を掛け、全員が立ち礼をして着席をする。担任で現代社会担当の浅野先生は転校生がいる事を、切り出し廊下にいるであろう転校生に向かって声を掛ける。

教室のドアが開けられ、一人の少女が入ってくる。

クラス中の（特に男子）がどよめく。女子にしても所々で囁き声が聞こえてくる。

その転校生は、三日前に出会い昨日再会したあの少女によく似ていた。本当によく似ていた。まるで本人かと思えるくらいよく似ていた。

「・・・河上舞衣です」

短い自己紹介の後、舞衣・・・さんは俺の席から丁度反対側の廊下側の一番後ろの席に着席する。

担任の話が終わり一時間目の授業までの短い休み時間に、クラス中のほとんどの女子が舞衣・・・さんの席の周りに集まる。

「高野、創野。俺達も行くぞ！」

「おお！！」

「勝手に行く」

アホな高野と沢田を見送ってから、俺は窓へと視線を移した。

正直よく分からなかった。どうしてあの少女が俺の学校に転校生としてくるのか。

「創野君は興味ないの？」

「そう言う悠子さんは？」

俺に話しかけてきたのは、生徒会副会長で俺もよく話をする橋悠たちはな子さん。クラスの学級委員も兼ねていて、結構可愛い。

「話はしてみたいけど、あれじゃあ話せそうもないしね」

「それが賢明だな」

「えっ？」

「ん？」

「創野君まるで、河上さんと話したことあるような口振りだね？」

会った事あるの？」

悠子さんは一見天然そうで鈍そうな外見だが、結構鋭かったりもする。

「会ったと言うか。何と言うか」

一時間目の始業のチャイムの音に救われた。悠子さんから逃げるように自分の席へと着席する。

一時間目から数学で数学が壊滅的な俺にしてみれば、朝から鬱病にでもなりそうだ。

因数分解だが二次方程式だか関数だかを右から左へと聞き流しひたすら睡魔と戦っていた時間は過ぎて行き、休み時間になる。

休み時間になるとまた女子が集団で向かうのかと思ったがそうではなかった。恐らくさっきの休み時間に思い知ったのだろう。河上舞衣という少女の性格を。きつとどんな質問にも無言だったんだらうな。

女子では悠子さんだけが、男子は沢田と高野の田園コンビが連合軍を組み舞衣・・・さんに戦いを挑んでいた。

次の休み時間には撃沈しているだろうに。

そう思っていた俺は次の休み時間も三人で舞衣・・・さんの机の周囲に集まって行ったのには以外だった。

三時間目の休み時間もまた三人で集まっていた。他の女子はもう興味がなさそうだし、男子は話したくても話し掛けられないと言っ

た奴がほとんどだ。

と言う訳で俺もどんな話をしているのか興味があり、グループの中に入れてもらう事にした。

「何の話をしてるんだ？」

「えっとね私達の紹介だよ」

「そうそう。お前もやつと来たか」

「曹操といえば三国志だな」

悠子さんはともかくうるさいぞ。その田園コンビ。

「さつきね創野君と河上さんが知り合いになって話しをしてたんだよ」

「……知り合い」

「やっぱり知り合いなんだ」

いきなり田園コンビに羽交い絞めにされ、教室の隅へと拉致られた。

「創野くうくん。知り合いってどういう事かなくん？ 河上さんねえくさっきの一言が最初に話した言葉なんだよあ？」

「そうそう。さつきまでずっと無言だったし」

「曹操と言えば三国志だな。うん。では俺はこれで」

逃げようとする俺を田園コンビは掴んで放そうとしない。

「僕達仲間だったよねえ？ 彼女いない同盟の仲間だったよねえ？」

「そうそう。裏切り行為は万死に値する」

「曹操と言えば三国志だな。というか俺はそんな同盟に参加した覚えは……」

「彼女いないのは強制参加の同盟なのだよ、曹操君」

「そのそのその」

「創野と言えば、俺だな。じゃ、そういう訳で」

にこやかな笑みを浮かべ。俺は一人から脱出に成功する。後は休み時間が終わるまで逃げ切ってる。

「まてえ！！ 死刑囚め！」

「うちくびじゃあああ！！」

随分酷い言われようだなおい。

昼休みは学生食堂いわゆる学食で舞衣・・・さんを入れた五人で食べた。田園コンビもちゃっかりと一緒にだったりもする。

午後の授業も平凡に過ぎていき、田園コンビは仲良く掃除当番なので俺だけ先にさっさと帰ることにする。

階段を降りる俺の制服の襟を誰かが掴み、あやうく窒息死しそうになる。

「おいしいい！！死ぬって窒息死するって！！」

「・・・あの子、誘拐される」

「真顔で冗談は止めてくれ。特に舞衣・・・さんは」

「・・・誘拐される」

「マジか？」

静かに首を縦に振る。

「・・・多分」

「あの子って田園コンビか？」

首を横に振る。

「じゃあ、悠子さんか」

首を縦に振る。

と言う訳で、俺と舞衣・・・さんは悠子さんを尾行する事にした。悠子さんは友達何人かと一緒に下校しており、無事自分の家まで帰った。

「悠子さん帰っちゃったぞ？」

「・・・」

もしかしたらこの後外出した際に、誘拐されるのかも知れないと思ひ、悠子さんの家の周りを張り込む事にした。

それにしても、悠子さんの家ってお金持ちだったんだな。凄い豪邸だ。敷地も広そうだし。

夕方になり、辺りが暗くなっても悠子さんは家から出て来なかった。

「舞衣さん。食べ物買ってきたよ」

「……?」

「あんばん。張り込みにはこれでしょ」

牛乳も渡し、二人で電信柱の影に隠れあんばんを頼張る。絵的にはかなり怪しく見えるのではないだろうか。

「七時少し前か。いくらなんでもこれ以上は」

「……来た」

悠子さんが、家の玄関というか門から出てきた。どうやら買い物にでも行くみたいだった。買い物袋を提げている。

悠子さんの後を尾行する、怪しい高校生二名。通報されはしないだろうか。

そんな気苦労をしながら、悠子さんの後を歩き出して少しして悠子さんの近くにワゴン車が止まった。

どうやら運転手が道を聞いてるらしかった。俺がほっとため息をついたのも束の間、いきなりワゴン車の後ろのドアが開き何人かの男が悠子さんを取り囲んだ。

「創野!!!」

「ああ、わかつてる!!」

走りながら、地面に落ちていた太い木を拾い上げ、それを振り回しながら男達に襲い掛かる。

男達に囲まれていた悠子さんの手を掴み、その場から逃げる。

「走って!!!」

どうやら男達は、追ってくるよりも失敗したのでその場から逃げようと車に乗り込んだ。

俺はそこまでを見届け、後はすべて舞衣さんに委ねて悠子さんを連れて走った。

「大丈夫?」

「……怖かった。でも創野君が助けに来てくれて。ありがとう」

「お礼なら俺じゃなく、あいつに言ってやって」

後ろを振り返ると舞衣さんが立っていた。悠子さんは舞衣に抱きついた。

「ありがとう。ありがとう河上さん」

近くのスーパーで醤油を買い、悠子さんを家まで送っていく。

「警察に届けなくていいの？」

「大丈夫。あいつらなら今頃捕まってるよ。なあ？」

「・・・うん」

悠子さんの家の玄関と言つか門の前で別れる際に悠子さんが言った。

「河上さんの事舞衣さんって呼んでいいかな？」

「・・・舞衣でいい」

「じゃあ、私の事は悠子って呼んで」

舞衣さんは照れた頬を赤くして首を縦に振った。

この事件を機会に舞衣と悠子さんはいつも一緒にいるようになった。ちなみに田園コンビの二人も加えての五人でいる事が学校では当たり前のような事になる。

「ねえ舞衣は球技大会何出るの？」

「・・・悠子と同じのでもいい」

「そう？ 私はソフトボールに出ようかと思ってるんだ。舞衣はソ

フトボールでいいの？」

「いい」

球技大会か。そういえば来月の頭にあるんだもんな。今年は何に出ようかね。

「創野君は何出るの？」

「サッカーかな。どうせ田園コンビも同じだろうしね」

「田園コンビってひとくくりにするな！」

「そっだそっだ」

うるさいぞ脇役コンビ。

そういえば、今の舞衣は学校の制服を着ている。いや、学校なのだから当たり前だろと思う方思い出してください。舞衣の登場の時夏も近いのにコートを着込んでとか書いていたような気がするが、あれって伏線じゃなかったの!?

ターニングポイント

てゆうか夏も近いつて今何月なんだよ。

「今は六月だ」

「梅雨の季節だな」

なんかもう滅茶苦茶だなおい。

そんなこんなで意気揚々と球技大会に向けて練習を開始するのだ
った！ 体育の時間にな。

第4話「夏の始まり〜水島〜」

暗い。

夜だから当然だ。田舎道だし暗いのは当然だ。

じゃあ、そんな夜道を俺は何故走っているのだろう。答えは簡単だ逃げているからだ。追っ手から。

少しでも遠くへ、少しでも速く……。

目の前を一人の人影が塞いだ。俺は走るのを止めてその人影と対峙する。

その少女が長い髪をポニーテールにしてるのは、悠子さんにしてもらって以来、気に入っているからだ。

「よう舞衣。お前が俺の追っ手か」

「……」

無言で俺に向かって剣を構える。

「お前はそういう奴だよな」

「……」

「当然か。今の俺はただの犯罪者だもんな」

正直、本気でやっても舞衣に勝てる自信なんか何処にも無い。だが、少しでも時間を稼がなければならぬ。それが俺の役目だから。

地面に落ちていた太い木の枝を掴み、それを舞衣に向け構える。

「……せめて。苦しまないように」

それがせめてもの手向けのつもりなのだろうか。舞衣は少しも変わらぬ。

もし、戻るのなら時間が戻って欲しい。もう一度、あの楽しかった頃に。笑っていられた時間に戻りたい。

舞衣が転校して来てはや一ヶ月が立った。一ヶ月も経つと、舞衣もグループと言うものの中に入る事になる。そのグループは俺と悠子さんと田園コンビの二人を入れた五人の事だ。

ちなみに倉田和也をもう忘れている人にとつてはどうでもいい話だが、あいつはレギュラーでもなんでもないのであしからず。

「なあなあ、映画って面白いと思わないか!？」

と興奮気味に話題を持ちかけてきたのは沢田である。聞くところによると彼は今大ヒット上映中の映画「過去からの答案用紙」と言うかなり意味不明なタイトルの映画を見てきたらしい。

余談だと思うがこの物語のタイトルも意味不明だ。

で、その映画に感動した沢田+高野の田園コンビは映画を作りた
いと考えているらしかった。

「却下」

「面白そう。ねえ舞衣?」

静かに首を縦に振る。

この一ヶ月で気づいた事だが、舞衣は無口なので誤解されやすい
が、実はかなりの天然なキャラだと言うのが分かった。

てか、今回の物語って球技大会の話じゃないのか!?

「だろ? 映画は素晴らしいんだよ! そんな素晴らしい映画を皆
で作ろうじゃないか!」

そんなこんなで映画を作る事になった俺達は、映画研究会に手伝
ってもらえないかと思いい、話をしてみると。

三年で去年の当時一年の俺に生徒会会長選で俺に負けた山崎が部
長だった。

こいつが部長なら話は好転しないかと直感した俺なのだが、はて
さてその直感が当たったかといえば、結構当たらなかつたりもした。
話を聞くと山崎も今度の映画は超大作みたいな物を作りたかつた
らしく、役者の数が少ない事に困っていたと言う。これこそ渡りに
舟と言う事で共同で映画を作る事になった。

と言つても、素人集団五人が面子に加わつてもどれほどの戦力にもならないだろう。というか邪魔でしか無いと思うのは俺だけだろうか。

映画を作る！なんて言っていた沢田と高野はその為に勉強したのかカメラの使い方などを既に知っていて予想外にも大きな戦力になっていた。

悠子さんも自分で物語を考えるのは好きらしく、映画研究会の人とシナリオ作りの打ち合わせをしている。

俺と舞衣はと言つと、する事が無いので隅っこの椅子に腰掛けていた。

「ミステリー要素も入れた方がいいんじゃないか？」

何気なく映画研究会の生徒が言ったその言葉のせいで部室のドアが蹴破られる。

「ミステリー要素とな！ならば俺が参加せずしてどうする」

いきなり意味不明なことを言いながらドアを破壊して登場したのは無類のミステリーマニア、倉田和也だ。

「なに、派手に登場してんだよ。第一お前はもう出てこないって今回の話の最初辺りに言ってるんだぞ」

言った側から出ると色々大変なんだよ。何が大変かって、それはあれだよ色々だよ。

「じゃあ、ミステリー要素も入れて倉田さんにも登場してもらいましよう」

おゝい。悠子さん。一体どういうシナリオを書き上げるつもりでしょうか。ってかどんな物語なんですか。

「暇だなあ」

「・・・手伝えばいい」

「舞衣、舞衣も一緒に考えよう」

「うん」

悠子さんに呼ばれて、舞衣はシナリオ班の所に行ってしまう。一人残された俺。

「全く、役に立たない男とはお荷物以上に哀れだな」

「お前に言われたくないぞ、ミステリーマニア」

「ミステリーマニアじゃない！ シャーロックホームズだ」

意味が分からん。第一あれだ、シャーロックホームズってのは実在の人物じゃないんだよ。フィクションなんだよ。実在の地名・団体・人物とは一切関わりがありません。なんだよ！

「シャーロックホームズは実在の人物だ。ここにいるではないか」と言つて、自分を指差す倉田和也。こいつの頭の中の構造がどうなっているのか一度見てみたいものだ。絶対推理マンガで埋め尽くされてやがる。

メガネを掛けた少年がけしからん事に人を指差して「犯人は、お前だ！」って言っているに違いない。

そんな具合に日にちは進み。書きあがったシナリオ兼台本に俺は今日を通している。

物語は海の見える街の高校が舞台だった。青春物にありがちなひと夏の淡い恋物語。なのだが、殺人事件なんぞに出くわしたら淡い恋が一気にホラー街道まっしぐらだよ。

実る恋も実らないというか。

まあとにかくあらすじ行ってみよう。

あらすじ。海の見える小さな町で少女は

「おいしいいい！！ 訴えられる！！ それ以上言つと訴えられる

！！」

「なんで？ 何も問題ないよな」

「そうそう。三国志の曹操」

「おまえらなあ」

「分かった分かった。じゃあ真のあらすじに行ってみよう」

あらすじ。雪。雪が降っていた。厚い雲の向こう側からは

「おいしいいいいい！！　いい加減にしるお前ら！！　もういい俺がやる」

　　「まったくこれだから田園コンビには任せておけないんだ。それと田園コンビいつまで三国志ネタ引つ張るつもりだ。」

　　「あらずじ。」

　　季節は夏。海沿いの街。その街の親戚の家に預けられる事になった少年は一人の不思議な少女と出会う。人生の中で一番大切になったその夏の季節を・・・。

　　笑いあり、涙あり殺人事件ありの感動青春ラブストーリー。ひと夏の大切な時間を君に。

　　「だそうだ」

　　そんなこんなで、シナリオは完成したがすぐに映画の撮影を始める訳にも行かなかった。何故かって？　それは俺達の住んでいる街は海沿いに面していないからだ。海に見える街で撮影を行わなければ、意味が無い。

　　そしてこの時の俺は夏休みが丸ごと食いつくされる事を考えていたかと言えば。正直な話、全く考えていなかった。その時の俺は、海沿いの見える街を探し続け、見つけたら向こうの学校の生徒会や教職員の人たちに連絡を取り、夏休み中学校を少しだけでも使わせてもらうことが出来ないかを尋ねていた。

　　これは、俺が生徒会会長であるから出来る特権であって、少しは俺の権力を思い知ったか愚民どもめ。

　　まあ今の所全部断られてるけどね。

　　気がつくと、辺りが暗くなり始め時計が六時を指していた。今日は後一箇所だけ掛けたら終わりにしようと思ひ、俺は生徒会室の電話を取った。

　　「もう六時か。そろそろ帰ろうか？」

「まだ、仕事残ってる。学園祭の企画もしなくちゃいけないし、スポーツフェスティバルの日程も組まないといけないし」

「やれやれ。今日もまた八時近くかな」

実の所もう二週間はずつと帰りが八時近くだ。生徒会会長は過労死するほど仕事が多い。まあでもその分内心点はよくなるからいいけどね。

「佳織先輩、先に帰りますね」

「うん。帰り道に気をつけてね、最近物騒らしいから」

「佳織先輩も気をつけてくださいね、その会長さんに襲われない様に」

「あのなあ・・・」

僕が反論する間もなく、一年の生徒会役員。書紀と庶務は帰ってしまふ。生徒会室に残されたのは、生徒会長である僕と、福生徒会長の水島佳織みずしまかおりの二人だ。

生徒会。といってもこの学校の生徒会は他校の様に立派なものはない。特に僕以外の男子は定例会にも出席しない不届き者だ。もっぱらこの生徒会室は女子生徒の交流の広場と言ってもいい。

「ユキ。この学園祭の企画案はどう？」

ユキ。というのが僕の仇名。いい加減それで呼ぶのも止めて欲しい。なんか女の子みたいな名前じゃないか。

そんな事を佳織に言った所で止めようとはしないのだろうけど。

僕と佳織は幼稚園の頃からの幼馴染で家も近所だから昔はよく遊んでいた。今は、遊ぶと言う事はないけど、同じ生徒会の役員で一緒にいる事は多い。

一時期、僕と佳織は付き合ってるなんてデマが流れたけど、本人はいつものように冷静に他人事のように噂話に交じていた。でも、佳織が本当に誰かと付き合ってるなんてこと聞いた事がない。どうしてだろうと僕はたまに不思議に思う。人当たりもよく、可愛いのに。実際佳織は結構もてる。

「仮装行列か、面白そうだね」

僕と佳織が企画案書を眺めていると、生徒会室の電話が鳴った。僕は電話の受話器を取り、電話に出る。

「はい。石原高等学校生徒会室です」

電話の向こう側にいるのは、どうやら先生だった。一通りの説明をされた後、先生は言う。

「この件は生徒会に全権任せるから、話だけでも聞いてよ」

「はあ」

と言って向こうは電話を切る。切る前に「たぐっちは忙しいのに」と言った愚痴が聞こえてきたのは内緒だ。

「どうしたの？」

尋ねてくる佳織に先生の話の説明する間もなく、また電話が鳴り響く。

「はい。石原高等学校生徒会室です」

暑い。暑い。暑い。あ……。

「……うるさい」

「あはは」

どうやら声に出していつていたらしいな。俺はきちんと心の中で言っていたつもりだったが、右隣の舞衣がうっとうしそうに俺を見ている。その隣にいる悠子さんも顔こそは笑顔だが、なんか怖い。

俺達は今、石原町という海の見える小さな町に来ている。どうしてかって？ 答えは一つ！ ついでに現実も常に一つ！ と言う事で映画の撮影であるのであります。

俺の住んでいる所よりも東北の方に位置すると言うのに、なぜか暑かった。物凄く暑かった。今年の夏はすさまじい猛暑かもしれ

ない。

「だらしがないぞ。探偵たるもの、精神力を鍛え・・・」

「お前は黙ってる」

後ろには機材一式を担いで、せつせと行軍する田園コンビと映画研究会の面々。

それにしても本当に暑い。汗が額を伝って落ちていくし。落ちてった汗は熱されたアスファルトの前にすぐさま蒸発していくし。

二日前に夏休みを迎え、これから楽しい楽しい夏休みが始まるかと思えば、なんでこんな暑い中行軍しなければいけないのか。いや、だが。今回の映画撮影のおかげで、悠子さんを始めとして、演劇部の女子も何人が参加しているし、悪くは無いかもしれない。

映画と言うのはカメラマンとかスタッフだけでは撮れないというのは当たり前。映画に出演してくれる人たちは、少し前に募集して演劇部がほとんど参加してくれたし、映画に出てみたいという奴も何人が集まった。それに、撮影の舞台となる石原高等学校側からも何人かのエキストラが参加してくれるらしく、役者には困らない。

石原高等学校生徒会会長と副会長の二人が先頭に立って、俺達のを止めてくれる旅館に案内してもらっている最中だ。まさか、旅館の手配まで向こう側でやってくれるとは思わなかった。

それにしても、駅から行軍がスタートして、山の方へ向かって歩いているが、いつなってもゴールが見えて来ない。

道路をほぼ占領するように広がって歩いているが、車がほとんど通らないから危なくも無い。

「まだ、着かないのか？」

「もうすぐよ。この坂を登り切ったらすぐの所にある」

そう言っつて、副会長が指差した道は、今歩いている道路を右に曲がり山に入っていくような道だ。というか長いぞおい。

それでもどうにか坂を登り切った俺達を出迎えたのは、想像以上に大きな建物だった。

女子が感嘆の声を上げる。まさかこれほど立派だとは想像してい

なかったのだろう。まあ俺もだけどね。それは立派な旅館だった。
「おい、これ一泊いくら盗られるんだよ。予約するならもつとボロ
ツちくても」

「とられるの漢字がなんか違うようになってると思うのは、僕だけ
かな」

と言って生徒会長殿は笑った。

「佳織に聞いた方が早いよ。ここは佳織の家なんだから」
「へえ」

その旅館は看板に大きく「水島」と書かれていた。

こうして俺達は旅館「水島」を拠点として、全く見知らぬ土地で
の夏が始まるうとしていた。

この時の俺はこのひと夏に起こる大事件を知らずにいた。もし知
っていたのならばすぐにでも帰ろうとしたか、あの決断を迫られたと
き、間違った決断をしなくても済んだかもしれない。

だが、この時の俺は、限りなくそんな事を考えてもいなかったの
だ。

第5話「何事も計画的に〜海〜」

「では、何故その答えに行き着くのか。我が助手ワトソン君に説明してもらおうワトソン君！」

「え〜。何でその答えに行き着くのか。それは恐らくきつとそれが真実だからでありましょう。と言うかなんだこの始まり方はいきなり意味不明じゃねえか」

言うまでも無く「カット！！」と言う大声が響き渡る事になる。

映画監督の山崎は台本を丸めてなにやら熱の入った指導を繰り返している。

つまり今は映画の撮影中なのだ。で、俺の役柄はワトソン君。と言う名の主人公なのさ。

いや、主人公がワトソンと言うのじゃないんだよ。本当はね。でも和也のアホがワトソンとしか言わないんだ。で、今はどんなシーンを撮っているのかといえば、物語の中盤。学校内で起きた殺人事件の真相説明のシーンだ。てか物語の中盤で殺人事件って大丈夫なのかこのシナリオ。

いや。まさか悠子さんが書いたシナリオを批判する訳では決して無いから。うん。

と言う訳で、今回は映画の前半部分の話である。

「たのも〜」

「いらっしやいませ」

コンビニのレジを打っている少年は俺と同じ年くらいだった、と言う事でバイト少年。

「君達。映画撮影に来たんだって？」

「そうだ」

「僕もエキストラで出演させてもらっよ。どうせ暇だったし。それにしても随分色々買っんだね」

「どうせ、明日にはまた別な奴が来てるさ」

レジを通して受け取った荷物を自転車の籠に入れて他は荷台にしっかりと括り付け、俺はバイクで走り出す。

「あ〜。あちいよ〜」

キコキコ。自転車を・・・いや、バイクのペダルを漕ぎ続ける。それにしても暑いなあ。海沿いの町ってこう海からの爽やかな風で気分爽快なもんじゃなかったのか。

「てゆうかよ〜。今回は映画の前半部分の話だっけって言ったじゃん。なんで俺が買出ししてんだよ。あちいよ〜」

俺はひたすら自分の行為をのろっていた。チヨキにパーで立ち向かおうとしたアホな俺を呪い殺したくなるほど呪っていた。あ〜あちい。

撮影現場の石原高等学校は丘の上の高台に位置している。校門を通り校舎まで続く坂道を登りきり、右側にある駐輪場にバイクを止め。両手一杯に荷物を抱え、校舎の中に入っていく。

石原高等学校は道路を挟んだ向こう側には海が広がっているという立地条件だった。どの学年の教室からも。海が見渡せるという授業の逃避には持って来いの場所じゃないか。

生徒会室に戻ると、腹を空かせた男子連中が、俺の持っていた食べ物とすぐに奪い去る。後飲み物もね。

俺達がここに来て撮影を始めてから三日が経った。実はこの三日の間に俺は十六年の人生にピリオドを打たれてしまうほどの事件に巻き込まれていた。

始まりは、クラス一、いや俺の通う高校一スケベな男の何てこと無い欲望に満ちた言葉が始まりだった。

その日は撮影初日だった。俺達が来て二日目の夜だった。それすなわち昨日の夜とも言つ。

大部屋に男子全員がぶち込まれ、タコ部屋状態と化しているが、それでもトランプをするもの、テレビを見る者。風呂に行った者。寝てる者とそれぞれが思い思いの夕食後の時間の時だった。

クラス一、いや俺の通う高校一スケベな男。東一徳あすまかすのりが田園コンビ

と何やら話し込んでいた。

そこで俺はそんなアホな奴らなんかほっといて、露天風呂に行けばよかったのだろうが、少しばかり気になってしまい、声を掛けた俺を誰が責められよう。

「なにしてんだ。田園コンビそれにいつとく」

ああちなみに、一徳。これでいつとくでみんな呼んでるので、かすのり。ではなくいつとくで呼んで頂けるとはなはだ幸いである。

「おお。創野かい所に来た」

「お前も仲間に引き入れてやるよ」

部屋の片隅に固まるアホ四人。そこで一徳は重大なアホ発言をする。

「女子風呂覗き行こうぜ」

「俺は行くぜ」

「俺も行く。創野お前はどつするんだ？」

どつするんだと聞かれたらこの物語の進行上答えは一つしかないだろう。

「さあて、男風呂にでも行くかあ」

と言って、エスケープする俺を田園コンビと一徳が捕まえる。

「おっと、この話を聞いたからにはにがさねえぜ」

「お前も共犯だ！」

「なにそれ、山賊ルール!？」

と言う事で女子の露天風呂を覗きに行く事になってしまった。それにはまず旅館の外に出て、山の中を直進すると言うルートを取った。

旅館の玄関の所でユキと出会い、田園コンビと一徳に拉致されてしまったのは気の毒な事だ。本人は水島さんに用があったらしいが。

「なんで、僕まで・・・」

「計画を聞いてしまったからさ」

「てゆうか君達が勝手に言っただけだろうが!!」

「静かにっ!!」

俺が静かにと云ったのは人に気づかれるからではなく。俺達以外の何者かの人間の気配を感じたからだ。まさか旅館の人の見回りだつたら少し困るが。慎重に道を進んで行き、一徳の言う覗きポイントまで到着するが、そこには既に先客がいた。

「・・・なにやってんだお前」と俺。

「いや、その。覗きをする輩を成敗する為に・・・」
あからさまに見苦しい言い訳をする倉田和也。

「嘘つけお前絶対除きしようとしてただろ！ 抜け駆けは許さんぞ！..！」

と自分が怒れた立場じゃない一徳。

「このミステリーマニアめ！ そんなことしてシャーロックは泣くぞ..！」

「そうそう。三国志の曹操！」

騒ぐ和也と一徳それに田園コンビはほっという、俺とユキは近くの岩に腰を下ろして休んでいた。と言うか田園コンビの片割れ、最近三国志の曹操ネタしか言って無くないか？ てか影薄いし、台詞少ないし。

「面白い人たちだね」

「自分が犯罪に巻き込まれるという緊張感を少しは持てユキ。ただでさえ君は田園コンビとかよりよっぽど重要な役柄なんだから」

そんなのほほんとしていた時。柵で区切られた向こう側の扉がガラガラと開く音がして、それに次いで声が聞こえてくる。

「わゝ。広いし空いてるね」

聞き覚えのある声が聞こえてくる。てかこの声もしかして・・・。「この時間帯は比較的空くのよ。ここで暮らしてるものの知恵よ」この声も聞いた事がある。というかここで暮らしてるって時点で誰なのかすっかりモロバレじゃねえか！ 俺は隣にいるユキの顔を見る。

すっかり硬直してしまい。声が届いているかさえも微妙だった。

ユキ自身も水島さんが入ってくるなんてことを考えてもいなかったのだろう。

「舞衣く早くきなよ。舞衣く」

「・・・うん」

やばい！ 確定だ。柵の向こう側。すなわち露天風呂にいるのは舞衣と悠子さんと水島さんの三人だ。この三人だけはまずい、他の奴らならともかくこの三人だけはやばいと俺の本能が直感的に感知する。

「おい！ 逃げるぞ！ この三人はやばい！！」

てゆうか舞衣がいる時点で絶対にもうばれてる！ 俺達がここに
いるのばれてるって！

「ああ・・・確かにやばいな」

分かってくれたか一徳！

「悠子さんに舞衣さん。それに佳織さんとは美少女揃いではないか。
グフフたまらんがな」

おい！！ 全然分かってなかったよこの人！

「おい、和也。仮にも探偵目指すお前が・・・」

和也は既に鼻血を出していた。いやてゆうかまだ見てもいないだろう。声だけで鼻血ってお前どんだけ妄想膨らませてるんだよ。

「この柵、隙間が全然ねえな・・・」

「上から覗こうぜ」

上から覗こうと、柵に足をかけ登る高野と沢田。いい加減にしろ田園コンビ。お前ら天国への階段二段飛びくらいで駆け上がってるのが分からないのか！！

田園コンビがそうつと柵の上から顔を出した。どんな花園が広がっていたかは俺はしらんがかなり想像を絶するものだったらしい。

田園コンビの反応だけでそれが分かった。

「貴様ら！ 俺を差し置いて何をしている！！」

鼻血ボーイの和也が勢いよく柵を登ろうとする。向こうの花園を自分達だけのものにしようと思死に和也が登るのを撃退する田園コ

ンビ。

「おい、お前ら暴れると・・・」

遅かった。もう全てにおいて遅かったのかもしれない。柵はめきつと音を立て倒れた。

「うわ」

「ぐわ」

「いて」

という言葉が聞こえた気がしたが、んなこともうどうでもいい。

俺は呆然自失のままそこに突っ立っていた。

悠子さんと舞衣と水島さんの三人が、倒れた柵に驚きこつちを見ている。俺と目が合って、数秒の沈黙がその場にのしかかった。

そして、その沈黙は打ち消される。

「きゃああああああああああ！！！！ 変態！！！！」

舞衣はともかく、悠子さんと水島さんは定番通りの悲鳴を上げる。

「ち、違っただ佳織！ これは・・・！！」

「残念だけど、もうだめだ！！ 逃げるぞ！！」

言い訳をしようとするシャイボーイのユキを連れて、俺はその場から光速の勢いでエスケープする。というかユキい！！ この状況でどんな言い訳を言ったら相手が納得すると思ってる。

どんな言い訳ももはや通用しないんだぞ！

主犯格の馬鹿三人はどうでもいいが、少なくとも無理矢理巻き込まれた俺とユキだけは逃げ延びる権利があるんだ。

俺達はとにかく走った。少しでも速く少しでも遠くに逃げ延びるために、そして風になるために！！

「いや、風にはならなくてもいいよ」

「この状況でよくボケられるな。ってかここまで来ればもういいだろ」

俺とユキは石原高等学校の前まで逃げてきていた。もうここまで来れば、さすがに・・・。

「ここまで来ればさすがに・・・なんですか？」

「てへっ」

可愛く誤魔化そうとする俺だが、そんな事は通用しない。さながらターミネーターのBGMか必殺仕事人のBGMが流れる中、俺とユキは恐る恐る後ろを振り向いた。

そこには明らかに怒っているのが分かる水島さんと、怒っているのか区別がそんなにつかないが恐らく怒っているだろう舞衣。それに満面の笑みの悠子さんが服を着て立っていた。

舞衣は刀、悠子さんはロケットランチャーを持っている。

「あはは。残念です創野君。君達は死刑です」

優しく悠子さんは幼い子供に接するように言う。言っている内容はどっかの裁判官みたいだが。

道の向こう側から、馬鹿三人が凄まじい勢いで走って来ていた。

どうやらあの状況を切り抜けて来たらしい。

「お、おお創野。お前らも逃げていたか。いやあさすがにここまで来れば」

「ここまで来れば・・・？」

「あ・・・」

馬鹿三人の声が見事に重なる。てゆうかもっと早く気づけよ馬鹿共。

「あはは。じゃあ皆さん。さようなら」

笑顔でそう言つて、悠子さんはロケットランチャーを構える。

「ち、違つんだ話を・・・！！」

「おいしいいい！！ 逃げるぞ！！ あんなんシャレにもならんわ！！」

ロケットランチャーが放たれ、上空から見ればチュドーンって感じな効果音が出ているような気がするが。あれの直撃を受けても、怪我一つなく、ただ少し黒くなっただけというのも、ギャグ漫画の成せる技であつて。

「とうるかこれ漫画じゃねえよ！ 小説だよ！！ 暗い。」

夜だから当然だ。田舎道だし暗いのは当然だ。

じゃあ、そんな夜道を俺は何故走っているのだろう。答えは簡単だ逃げているからだ。追っ手から。

少しでも遠くへ、少しでも速く……。

目の前を一人の人影が塞いだ。俺は走るのを止めてその人影と対峙する。

その少女が長い髪をポニーテールにしてるのは、悠子さんにしてもらって以来、気に入っているからだ。

「よう舞衣。お前が俺の追っ手か」

「……」

無言で俺に向かって剣を構える。

「お前はそういう奴だよな」

「……」

「当然か。今の俺はただの犯罪者だもんな」

正直、本気でやっても舞衣に勝てる自信なんか何処にも無い。だが、少しでも時間を稼がなければならぬ。それが俺の役目だから。地面に落ちていた太い木の枝を掴み、それを舞衣に向け構える。

「……せめて。苦しまないように」

それがせめてもの手向けのつもりなのだろうか。舞衣は少しも変わらない。

もし、戻るのなら時間が戻って欲しい。もう一度、あの楽しかった頃に。笑っていられた時間に戻りたい。

「なんて、シリアスやつてる場合じゃねえんだよ!!」

「はあっ!!」

舞衣の手にしている刀の前では、そこら辺に落ちている太い枝なんか、プリンよりも両断されるのが早い。例えば意味分からんけどね。

「ちょ、ちょっと待った!! あれだ! 主人公が死んだら終わる

ぞこれ。それでもいいのか!？」

「どうか安らかに」

殺す気満々だよ！ 殺す気満々だよこの人！！ あれだ。きっとこんな状況になったら主人公の特殊能力が発動して。

「んな能力何もねえよ！！ なんだ能力ってあれか超能力か！！」
舞衣の刀をなんとか避け続ける、俺だが、もうかなり限界です。せめて何か武器があれば。まああっても結果はそう変わらないだろうけどね。

「舞衣！ どいて！！」

舞衣が右側にステップを踏むように飛び退くと、目の前が開け。ロケットランチャーを構えた悠子さんがいた。

「あはは。創野君。死んでください！」

そこで俺の意識は途絶えた。次に目を覚ましたのは旅館の部屋の布団の中だったので、あれはもしかしたら夢だったのかもしれない。馬鹿三人もこれと言った変わった雰囲気は無く。きっとあれは俺の夢だった。

という終わり方でこの話が夢オチだったらよかったけど、そうは問屋が降ろさなかった。俺は朝風呂に入ろうと露店風呂に向かったが、今日は男子風呂と女子風呂が入れ替わっていた。

露天風呂に入った俺がまず目にしたのは、倒れた柵とそれを補修している従業員（男）の人たちの姿だった。

「すみませんね。昨日なぜか柵が倒れてしまったみたいで」

「そうですか。不思議ですね。はは。あはははは」

世の中には知らないでおいた方が良いという真実もある。あの馬鹿三人の身に昨日何が起こったのか、何てことは気にしてはならない事だ。

それから一日が過ぎ。午前中の撮影を撮り終え、昼休み中俺は屋上から海を眺めていた。何処までも続く海は大きく青かった。

「舞衣か、どうした？」

「・・・別に」

「そっか」

それから二人で海を眺めていた。

実はあの話には余談がある。俺が馬鹿三人としてひとくくりにしていたのは、沢田。高野。和也の三人だ。一徳はいつからか姿が見えなくなっていた。

気になった俺は、一徳の携帯に電話を掛けてみた所、本人はこう言った。

「俺は夏休み入ってから、ずっとこっちに居ただけ。お前達に着いて行きたかったんだけど、部活があつてなんだそう。」

世の中には知らない方が良いと言つ事はあるものだ。昨日俺達と一緒に行動していた東一徳あずまかずのりと同じ名前の少年が何年か前にこの海で死んでしまった事件があつたらしい。

それはもう昔の話だ。

第6話「それぞれの苦悩〜前編〜」

駆け足で時間は流れて行く。映画の製作も快調でこれと言ったアクシデントは無く進んでいった。月も七月から八月へと変わり、旅館”水島”に厄介になっている俺達一同は極力旅館の仕事を手伝うようにしている。

まあ、主に皿洗いとか風呂洗いとか廊下洗いとか。って、全部洗いで統一すればいいってもんじゃないぞ、大体廊下は普通、掃除だろうが。

八月に入り二日目の夜。例によって田園コンビが妙な話を持ちかけてくる。大体この前の事件にしても元々の元凶はこいつらのようなもんだしな。

「なあなあ、石原高校のプールに忍び込んで泳ごうぜ」

どうやら、この二人は泳ぎたいらしい。だが、しかしここで一つだけ言うておこう。俺を始めとして映画に出演する役者は日焼け対策として努力をし海にも行っていないが、役者以外のスタッフは全員海へと直行しているのだ。どうだこの理不尽な仕打ちは。

遠回しに言うてもなく、直球。ストレートでぶつけてみた。球速にして百四十キロくらいでな。

「でもなあ、夜の学校のプールに忍び込んでこそがロマンだろう。そこで未知とな遭遇とか夢を持ってよ！」

お前らの未知と言えば病気がちの少女が。 。
とかだろうが。悪い事は言わん、小説ばかりを追いかけないでたまには現実を追いかけてみる、小説やアニメの様なおいしい展開がこの現実で起こるわけ無いだろう。

これも小説なんだからそんなおいしい展開にこの後するんだろうなあとかしてやってもいいんじゃないかと思っただ方。大変申し訳ないが、それは俺の一存でどうにかなる問題ではないんだ。

いや、ことうまく表現できないが、俺達の行動言動全てを取り仕

切っている奴がいるようないなような。

さつきから不満を言い漏らしているが、じゃあ俺がプールに行かなかったと言え、完全にそれとこれとは別問題だった。

なんだだらしねえとか思った奴。じゃあなんですか、俺に泳がない夏を過ごせとでも言うんですか。

んなもんあれだよ。そんな寂しい奴らは運動部の奴らくらいだよ。炎天下の元坊主にして白い球を一生懸命に追いかけているのさ。

例の如く、玄関にいたユキを捕まえて、男四人で石原高校の学校のプールに忍び込みに行った。

「うおらあ！ バンジージャンプ！」

沢田が馬鹿みたいにはしゃいで、プールの中に飛び込んだ。

「スマツシュ！」

何がスマツシュなのかよく分からんが、高野もプールに飛び込むユキを見ると、お先にどうぞとでも言わんばかりに、ジエスチャ―と表情で先に行けといってくる。

たまには俺も田園コンビの流れに乗っかり、何を叫びながら飛び込むか決めて走り出す。

「ウメ……」

ゲシッ

きつとそんな効果音が漫画だったら出ていたのではないだろうか。背中を蹴られた俺は逆さまにプールへとダイブした。

ぶばばばば。ほば。こばばばばあばあ！

「ぶべべべべえべえべえべえ！！！」

何とか水面へと浮上し、俺を蹴飛ばしたユキを睨む。

「おいこら、どういっつもりだ？」

「蹴った方がウケるかなと思って」

ああ大爆笑でしょうよ。田園コンビ二人はな。

とりあえず、ユキに復讐の意を兼ねて、プールに引きずりこみ沈める。

それからは、四人で馬鹿な事をして騒いだ。どれくらいの時間が

過ぎただろうか。恐らく一時間くらいだとは思う。水球に励んでいた俺達だが、ユキが水球をほったらかして校舎の方を見つめていた。「どうした?」

「今、佳織が歩いていたらよな。あっちの方向に」「あっち?」

指差した方向は、山へと続く坂道だった。確かあそこの先にはトンネルがあつて幽霊が出るらしい。石原高校の生徒なら誰でも知っている心霊スポットだ。

現に俺達も面白さ半分で昼間に行つてみた事があつたが、昼間でもそのトンネルは何処か異様な雰囲気を出していた。まるでこのトンネルに入つたらもう戻つて来れないかのような錯覚までを引き起こして。

気になつた俺とユキはその場所に行つてみる事にした。一応田園コンビにも声を掛けたが、田園コンビは行かないと言う。

服を着て小走りにで校庭を横切り坂道を登つていく。辺りは真っ暗で懐中電灯の明かりだけが頼りだ。

坂を登るにつれて、心臓の鼓動が早くなっているのが分かる。俺は何をそんなに緊張しているのだろうか。いや、何に恐怖しているのだろうか。俺の中の何かが告げる。引き返せと。まだ今なら間に合う、引き返せと告げている。

坂を登りきると、目の前には不気味に口を開けているトンネルが俺とユキを出迎えた。そしてトンネルの目の前には少女が立っていた。

「佳織・・・?」

「佳織!」

「待てユキ! ああもう!」

少女が吸い込まれるように、トンネルの中に入っていくのをユキが追いかけていく。俺は多少なりとも躊躇ったが、ユキをほっとく訳にはいかないので、トンネルの中に走って行く。

「どうしたの？ 舞衣」

「・・・少しお散歩」

「じゃあ。私も行くよ、舞衣」

「駄目。悠子はここに居て」

そんな事を言う舞衣は初めてだった。仲良くなってからはいつも一緒に居た。だから、舞衣が一人で行くというのだから、その意思を尊重するべきだと悠子は思い、あえて止めなかった。

旅館を出て、裏手にある山の中へ入っていく。

あてもなく歩いていた舞衣は、ふと足を止めて持ってきたバツクから刀を二本取り出し両手に持ち、バツクを投げ捨てる。

「・・・」

いつもいつも、同じ事の繰り返し。何度殺しても、何度でも現れる。だから、何度でも殺さなければいけない。

ゆっくりと瞳を閉じて、深呼吸を繰り返し、ゆっくりと前を見据える。広がる闇の中に浮かび上がる巨大な影。それこそが討つべき相手。舞衣は剣を構え駆け出す。

何時までも終わりが見えなかった。暗いトンネルの中を走り続けて随分経つが、未だに向こう側に通じない。

いい加減うんざりしていた時に、光が見えた。まさか走っている間に朝になってしまった。なんてことはないだろうな。だとしたら俺はいつたい何時間走り続けているんだ。

トンネルを抜けるとそこは、駅前だった。

「なんだよそれ！！ トンネルを抜けるとそこは雪国だろうが普通はよー！」

しかも何処か見たことがある駅だった。桜が舞う駅前の時計の前

に俺は立っていた。

「どういう事だろう？　ここは俺の住んでいる街の駅だ。確か俺は海に見える小さな町に行っていたし、季節は夏だったはずだ。どうして桜が舞っているのかよくわからない。」

「そういえば、ユキは・・・？」

忘れていた。完全に忘れていた。誰だ、俺の事を薄情者だと思っただ奴は。その通りさ俺は薄情者さ今頃気づいたのかい坊や達。

すみません。開き直りました。

それにしても、いつも人通りの多い駅前なのにどうして誰も歩いていないのだろうか？　いや、道路には車さえも走っていない。

何処か異様な雰囲気だ。

街を歩いてみても、誰とも会わない。誰も居ない。まるでゴーストタウンと化してしまっている。

別に何処か目的地があつた訳でもないが、どういう訳か俺は子供の頃よく遊んだ丘の上に来ていた。

そこは街を見渡せ、桜の木は一本だけ天に向かって伸びている。

子供の頃は俺のお気に入り場所だった。だが、もう何年もこの場所には来ていなかった。いや、来れなかったんだ。なのに。

なのに、どうしてこの場所に来てしまったんだろう。

「雨が、降って来たのかな」

「雨なんか降ってないよ？　それは君の涙だよ。何がそんなに悲しいの？」

聞き覚えのある少女の声が聞こえる。後ろを振り返ると、長い黒髪が風で流れている。

あの頃と変わらない優しい顔で俺をまっすぐに見つめていた。

「さくら・・・？」

「どうしたの？　そんなに驚いた顔して」

違う。違う。

「違う！　さくらなわけが無い！！　お前は誰だ！？」

「何言っているの？　桜だよ。坂上桜」

さかがみさくら

「違う！！ なんなんだよここは！？ トンネルを抜けたと思ったら俺の住んでいる街で桜が舞っていて、天国ですかこのやろう！」
「大丈夫・・・？」

近寄ってくる少女から逃げるように、後ずさる。
違う。違う。桜がここに、居るわけなんかない。

地面に落ちていた、太い枝を掴み、目の前の少女に向けて構える。
「もう一度だけ聞く、お前は誰だ？」

「わたしは、桜・・・」

「違う！！ お前が桜なわけが無い！！ 桜は・・・」
そう。あいつはもう、

「あいつはもういないんだ！ 俺の目の前で死んだんだよ！！」

「残念ね。せめて想い人と一緒に黄泉の世界へと思ってたんだけど」
辺りが、歪み暗闇になる。

「あれ？」

「気がついた？」

目が覚めると、目の前にはユキが居た。いや、ユキだけじゃなくて田園コンビもいる。

「ようやく、お目覚めか」

「つたく、もしかしたら死んだんじゃないかねえかと思っただぜ」

「俺は・・・？」

「プールサイドで派手に転んで後頭部を直撃したんだよ。今まで気絶してたんだ」
そうなんだ。

「ま、創野も起きたことだしそろそろ帰ろうぜ」

「そうだね、帰ろうか」

もしかしたら、俺は結構危ない橋を渡っていたのかもしれないと、ぼんやりする頭で旅館へと続く道を歩いていた。

「お〜、舞衣か。どうしたこんな時間に」

「・・・お散歩」

「女の子が一人だと夜は危ないよ。一緒に帰ろうか」

「そうそう。特に創野とかいう狼に襲われるからな」

「おい、田園コンビ、おまえら夜の海にダイブしてみるか？」

「俺は何も言っていないだろう!? 言ったのは沢田だし!」

「コンビは連帯責任だ！」

今回の体験も夏ならではの心霊体験として笑い話で出来る日が来るのだろうか。そんな日が来るまで、忘れずにいよう。今日の事を。

第6話「それぞれの苦惱〜前編〜」（後書き）

え〜。どうも。作者の相沢です。6話までお読みくださってありがとうございます。今回の話はどちらかと言えばシリウスが強かったと思いますが。たまにはこんな話もあるのです。次回からは普通にコメディが大半を占めますので、よろしくお願いします。

最後に更新が少し遅くなりましたが、どうか見捨てずお付き合いください。長文になりましたが、それでは

第7話「柔らかな日差しの下で缶蹴り」

とある小学校の裏手にある小高い丘。通称「憩いの丘」の入り口、
というか一番下の広い広場にコーラの空き缶が立っていて、空き缶
の周囲には何人もボーイズ達がいる。

かくいう俺もその一人である。

「坂上閣下！ 敵軍が動き出しました！！」

見張りの斉藤から報告が入るや否や、田中と田中や田中とか田中
とか田中とか田中が自分の持ち場につく。って！ 田中しかいねえ
じゃねえか！ 嫌がらせか。

「閣下！ 戦闘準備が整いました！」

「よろしい。皆の奮闘を期待します。作戦開始してください」

先生が体育祭で使うようなメガホン（正式名称実は知らない）で
全軍に作戦の開始を伝える人物こそが、俺達のリーダーである坂上
桜だ。休日を返上してまでと思うと少し憂鬱だ。だが、白旗を揚げ
る訳には行かないしな。やれやれだ。

夏休みの到来まで指折り数を数えているような季節の時期に、そ
の事件は起こった。

とある街のとある小学校に通う五年三組出席番号12番。赤野彰あかのあきら
が高らかに宣言する所からそれは始まった。

「俺は、坂上桜に告白する！」

と昼休みで当の本人はおろか女子が誰もいない教室で宣言するの
だった。この宣言をたまたま聞いていた俺は、この後に襲い掛かる
事件をこの時はまだ知る由も無かった。ただ、ああ、こいつはアホ
だなと思わなかった。この時はまだね。

それから三日が過ぎた辺りから、噂が過熱している事を知った。

彰が告白して桜が首を縦に振って、二人は今付き合っていると、彰は告白したが桜にブレンバスターを食らって意気消沈気味だとか。様々な憶測と報道が飛び交う中で俺も幼稚園の頃からの友達で、極度の推理マニアである倉田和也と共に調査を試みていた。

それは何故かって？ それは気になるからだよ。

下心？ 勿論あるに決まっているだろう、なにせ桜は俺の幼馴染であると同時に初恋の人なのだからね。ま、これは俺以外誰も知らない事だけだね。

そして、日にちが重なるに連れて、クラスの男子どもは二極化していった。

彰が率いる、彰の手下兼「告白成就応援団」と俺と和也が率いる「てめえが桜さんと釣り合いが取れるわけねえだろ鏡みるや」隊に別れて行った。

え？ てめえら一体何歳だ？ え〜と小学五年生だから十一歳かな？ 多分。

ませガキだと思った方達。恋することに年齢なんて関係ないのさ、それに桜はなんせ本当に可愛いのだから仕方ないだろこの野郎。

そんなこんなで確執と溝はどんどん深まるばかりで、所々で小さな小競り合いも始まっていた。

噂を知っている女子。と言ってもクラスのほとんどだけだね。とにかく女子達はどちらの軍にも加入せず、事の成り行きを見守っている。いわば中立軍だ。

ってゆうか、彰がさっさと告白して見事に振られればこんな状況になる事は無かったような気がするの俺だけだろうか。

そんな状況に業をにやしたのか、それともぶっ壊れたのはかは知らんが、とあるお昼ご飯の時間にその事件は起きた。

その日は給食が無く、それぞれお弁当を持参し屋上で食べる事を許可され、担任と一緒にクラスメイト全員がそれぞれの場所で弁当を広げていた。

桜を中心に右に俺達、左に彰軍と言った何とも異様な光景の中で、

彰が屋上の手すりを飛び越え、大声を出す。

「皆さん！ 聞いてください！！！」

さも一昔前にはやった未成年の主張気取りですかあなたはと俺は言いたくなるような展開だった。

担任を始め、屋上にいる誰もが彰に注目する。担任の教師が彰に近づいていくが。

「止まれ！ それ以上近づいたら俺はここを飛ぶ！」

アホか。

空でも飛ぶ気ですかあなた。

「やられたな」

と和也がつぶやいた。

「何をだよ？」

俺は聞くと和也は含み笑いをしながら言う。

「お前の負けだよ」

何が負けなのかよく分からないが、その三十秒後に知る事になる。

「俺は！ 坂上桜さんの事が好きだ！！ もし振られたら、俺はここを飛ぶ！」

空気が死んだ。

何これ、何この展開。あなたそれ卑怯だから、そんな言われたら誰だつて断れないだろうが。

「あ……えくと、とりあえずそこ危ないからこっちに戻って来てよ。彰君」

「俺は君が付き合おうと言うまでここを動かないさ！！」

明らかに桜は困ったように笑う。誰もが何もいえないまま。微妙な沈黙が続いた。

まずい。この状況が続くならば、桜は絶対に首を縦に振ってしまわうだろう。それだけは絶対に避けなければいけない。

だから俺は桜よりも速く口を開いた。

「卑怯だぞ彰！ 男なら正々堂々告白しろ！！」

「何を言う貴様。こんな堂々とした告白はないだろう」

「うっざしいストーカーやろう。堂々しているというのなら・・・」
缶蹴りで勝負だ！！ と俺は高らかに宣言し、今週の土曜日に缶蹴りでバトルを行う事になった。彰軍が勝てば桜と付き合う。俺達が勝てば二度と桜に近づかないという条件だ。

「まったく、勝手にあんな事言うんだから」

「なんだよ桜はあいつと付き合いたいのかよ」

「誰もそんな事言っていないよ」

明らかに桜は俺の独断専行に怒っているようだった。帰り道は最悪の雰囲気だ。桜の家の前まで来ても会話らしい会話はしなかった。嬉しかったよ」

「え？」

「じゃあね、土曜日頑張った」

そう言っつて、桜は玄関のドアの向こう側へと消えていった。

次の日から、俺達の缶蹴り特訓は始まった。

ちなみにバトル缶蹴りのルールを知らない人の為に説明しておく。バトル缶蹴りとは敵の缶を倒せば勝ちになると言う事だ。以上どんな手を使っつても敵の缶を倒せばいいのだ。

缶蹴りっつてそんなルールだっけと思う人。これはバトル缶蹴りなのだ。

クラスの男子が見事に半分に分れたものだから十一人はいるし、他のクラスからも面白半分て互いの軍に加勢する者も現れ、互いに敵の戦力は未知数だ。

こっちの戦力は桜を入れて総勢二十二。それぞれが想いを胸に集まった義勇軍である。

そんなこんなで、戦争の土曜日がやってきた！

「皇国の興廃はこの一戦にあると言っつても過言ではありません。正しい戦いなどはありませんが、今ここに戦いの悲しい鎖を断ち切る力を貸してください！」

和也の提案で、桜が戦闘開始時刻前に演説を行っている。ちなみに文面は和也が考えた物だ。こんなんで士気が上がるのかね。

「士気は上がらなくても、雰囲気は出るだろう？」

「はいはい。そうですね」

アホか。

「閣下！ 敵軍が動き出しました！」

「さあ、今こそ勝利を我らの手に全軍突撃！！」

七月十三日（土）朝十時。戦闘開始。

敵軍の缶は憩いの丘の頂上に陣取っている。明らかに上に陣取った方が有利だ。なにせこっちの缶の位置を見れるのだからな。

攻撃隊が三つに別れ、それぞれのルートで敵軍の缶を目指す中で俺は一人で別行動を行っていた。

「こちら、和也どうぞ」

「なんだ？ どうぞ」

「第一攻撃隊が敵の守備隊と交戦を始めたようだ」

「戦況は？」

「戦死者が二。敵は三だ」

「奮闘してるな」

「ところでお前そこから落ちるなよ」

「まあ大丈夫だろう、通信終わり」

守備隊の指揮は和也が取っている。その為俺は一人で別行動をし、崖からのルートで敵の本拠地を目指す。

崖と言っても断崖絶壁という訳ではないよ。ただ、落ちたら勿論死ぬけどね。

リスクは高いが、その分敵の守備は薄いのが、中央と右側と左側に守備隊を配置した敵の布陣からして、この崖から頂上を目指せば、戦いはすぐ終わる。

崖を登りきり、頂上にある砦に侵入する。恐らくこの砦の屋上に缶が・・・。

「掛かったな！ 創野！」

「なぬう！？」

砦に入るや否や、敵に囲まれてしまう。明らかに待ち伏せされて

いる。

「ふふふ、敵軍ではお前と和也が怖いからな。お前だけでも消しておけば随分楽になる。俺達の策にまんまとはまったな!! この砦に缶は無い!」

「うち! 謀ったな彰!!」

「者共かかれい!」

彰の声と同時に一斉に敵が襲い掛かってくる。俺は携帯していた便所モップを振り回しながら平和を訴える。

「止める!! 俺達が戦ってなんになる!? 平和的に話し合いで解決を」

「だったら、反撃するなよ!!」

その場を何とか脱出し、無線で和也に連絡を取る。

「おい、和也! この作戦バレバレだったぞと言っか缶無かったぞ」

「うん。そんな事は予想の範疇だし敵を少しでも分散出来たからよししよう」

「おいしい!! てめえ俺を缶に使いやがったな!」

「おっと、敵が第一防衛ラインと交戦中だ切るぞ。後は自己の判断で行動してくれ」

本当に切りやがった。あの野郎今日から百回くらい無言電話賭けてやるから覚悟しやがれこの野郎。

両軍とも防衛ラインを突破出来ず(というかこっちは敵の缶の場所すら知らない)缶を倒す事が出来ないまま、開戦から二時間が経過した。ついに敵の缶の場所を突き止めたと和也から無線が入り、俺達は攻撃隊は隊を立て直し、最後の突撃に備えて、会議を行っていた。

「和也からの情報によると、敵の本拠地はここより下。つまり中腹の広場にある。今からそこに突撃を仕掛ける。皆誰が倒れようと後ろを振り返らず、ただただ突撃するんだ! 防衛ラインももう持ちそうに無い、缶を倒して終わりにする!!」

「おお!!」

中腹の広場へと続く下り坂を目の前にし、互いの顔を見る。深呼吸をして、俺は右手を掲げる。

「全軍突撃!!」

「うおおおおおおおお!!」

坂を凄まじい勢いで駆け下る俺達だが、落とし穴に何人かが落ち、立ち止まるうとしたものがいた。

「立ち止まるな!! 進め!!」

「うおおおお!!」

広場になだれ込むと同時に敵軍が待ち構えていた。たちまち乱戦となり、煙幕スモークボールが撒かれる。辺りを煙が包み、咳き込む声が聞こえる。突風が煙を吹き飛ばし、缶の場所を指し示す。

「もらったああああ!!」

「やらせるかあ!!」

彰が服を掴み、俺は地面に引き倒される。

「くそ、離せこの野郎。離れたほうが身のためだぜ。俺の便所モツプは水を吹くぜ」

「うるせええええ、お前さえ倒せばこの戦いは終わる!!」

「ああそうかい。なら終わらせてやるよ! 今だ! 桜!!」

「ええ!!」

「なに!!? 何故こんな場所に桜さんが!」

「こんな事もあるうかと、崖側から桜に回りこませていたのさ! いけ桜! 缶を蹴れ!!」

だが、桜の行く手を敵の一人が遮った。

「くっ!!」

「ナイスだ!! 田中!! 缶を護れ!!」

「誰が田中だ俺は斉藤だよ!!」

「くそっ! 桜が捕まらなければ」

「終わりだ創野!!」

「切り札を使う必要も無かったのにな、舞衣ちゃん!!」

「誰だよそれ!」

「ここがどういう立地条件か把握してるのか？ 近くの遊具は」
「え〜と、確か「地球周り」が・・・ま。まさか!？」

地球周りとは、木の枝にロープをくりつけてターザンごっこを出来ると言う、殺人遊具だ。

そのロープで上からターザンよろしくつつこんで来る、舞衣ちゃんを止める術など。

「あるわけが無い!」

「舞衣ちゃん! いっけえ!」

「これで、終わり!」

カンッとサイダーの空き缶が雲ひとつ無い青空に舞い上がった。

「ん・・・?」

「起きましたかあ?」

目を開けると悠子さんが俺の顔を覗き込んでいた。その後ろには舞衣が座っている。

「もうお昼ですよ。お弁当ですよ」

石原高校の中庭にある大きな木の下で、昼飯を皆で食べる。食べながら俺は懐かしい気持ちに浸っていた。もう遠い昔の事のように思える。あの日の出来事。

木陰の隙間から差し日差しは柔らかかに包み込むように思えた。

第8話「すれ違う過去〜UMA〜」

右手には桶。左手には花。準備は万端、装備も万端。いざ出陣。なんて大それたものじゃないけど、俺は知り合いだった少女の墓参りに来ていた。

今日で丁度六年目だ。

六年前の今日に坂上桜は交通事故で死んでしまった。原因は車の運転手の居眠りだった。

それはあまりにも唐突な別れだった。俺は目の前で、自分の腕の中で死んでいく人間をあの日から今まで一度たりとも見たことは無い。いや、見る事が無くて当たり前なのだ。あんな経験そんなにしてたら。一体どんな暗い人生送ってるのだろうか。

時々思う。こうして墓の前にいると何処からか桜が来てくれるんじゃないのだろうか。桜は死んでなんかいないのではないだろうか。実際、俺はすぐには現実を受け入れなかった。悪夢のような厳しい現実から逃げて笑っていればいい思い出だけを振り返っていた。

勿論。今は懐かしく思い出を振り返るだけだが。ただ、少しだけ大人になったから少しだけ子供の頃とは違う疑問を抱くようにはなっていた。

人は何故死に、何故生きるのだろうか。交通事故で死ぬ人と死なない人の差は一体何なのだろうか。ただの運なのか日ごころの行いなのか、それとも生まれた時から決まっている運命なのか。その答えはどれなんだろうか。

桜の墓の前には既に線香が上げられ、花が供えられていた。俺よりも早く誰かが花を添えたのだろうか。家族だろうか。

「随分と、懐かしい奴がいるものだな」

声が聞こえ振り返ると、そこには赤野彰あかのあきいが立っていた。別々の中学校に進学して今に至るまで会った事はなかったから五年ぶりの再

会となる。

五年間も会っていないければ普通誰だかわからないと思うかもしれないが、やはりそれぞれに面影があるのだろう。久しぶりに会っても、成長して変わっていても誰だかわかるようだ。

「お前こそ随分懐かしいぞ」

「そりゃそうだな」

「五年ぶりか？」

「そうだな。にしても近くに來たついでだから寄ってみたらお前に会えるなんてな、桜さんの家族の人に会うのが嫌で時期はずれの墓参りか？」

彰の言葉に何処か引っかけりを感じる。時期はずれ？

「時期はずれ？」

と俺は疑問を口にする。それを聞いた彰は俺の正気を疑うような表情を一瞬だけだが、した。そして彰は肩をすくめて言っ。

「お前の事だから、桜さんの命日に合わせて墓参りをしているんだと思ってたんだがな。いくら命日にまで時間があっても時期はずれなんて表現の仕方はおかしかったかな」

「命日にまで時間があるだと？」

今度こそ彰ははつきりと怪訝そうな表情を浮かべる。だが、今の俺は自分の正気を疑われることなどどうでもよかった。俺は桜の命日にあわせて毎年墓参りをしている。

「桜は、六年前の今日に事故にあっただろう？」

「お前・・・大丈夫か？」

人を思いつきり哀れむような目で見つめていた。正気の次は頭でも疑われているのだろうか。

「何を記憶違いしてるのかわからないが、桜さんは六年前の十二月二十三日に亡くなったんだぞ、それも死因不明でな」

十二月二十三日？ 死因不明？ 何言ってるんだこいつ。

「あの冬は今でも忘れられない。桜さんの死にお前の失踪事件。お前が犯人だと疑われた時もあった、なんせ桜さんが死んだ日からお

前が行方不明になったんだからな、いかに小学五年生といえども容疑者にならざるを得なかった状況だったな。お前何処行つてたんだ？ 今更だが気にもなるしな」

分らない。分らない。分らない。桜が死んだのが十二月二十三日の冬で俺がその日から失踪した？ 俺が失踪した？ 何処へ行つていた？ ドコヘイツテイタ？ シツソウシテオレハドコニ。

「おい、どうした？ 大丈夫か！？」

遠くで誰かが何かを言っている。その声はだんだん遠ざかり、俺は地面に倒れる音を聞いて意識を失った。それすなわち卒倒とも言う。

目を覚ました俺は、自分の部屋のベットのの上に寝ていた。窓の向こう側の外は暗く、時計は夜の一時を指していた。

ベットから起き出し一階へと降りていくと、夜の一時だと言うのに妹がリビングでテレビを見ていた。

「目覚ましたんだ」

「ああ。寝ないのか？ もう一時だぞ」

「どうせ夏休み中じゃない、堅いこと言わないでよ」

そっかそりゃそうだ。

「あんた今度赤野さんて人にお礼言つといてよ」
「なして？」

「呆れた。あんた何も覚えてないの？ 赤野さんつて人が倒れたあんたをここまで担いで来てくれたんだから。病院に連れて行かなくてもいいのかつて聞いたら、軽い卒倒だから大丈夫だろうつてさ」

本当に我が妹は呆れたように言った。

そういえば、彰と話をしている俺は倒れたんだっけ。それもこれもあのアホがおかしな事ばかり言うせいだ、そのせいで俺の繊細な脳に多大な負荷を……。

「あんたの脳に負荷がかかるだけの性能ないでしょうに」

「うっさいな、それに出来の悪いものほど少しのことで負荷がかかりやすいものだぞ」

「あ、なるほどね」

納得するなよそこで！ 僕の繊細なマインドは傷つくだろう。

それにしても、テレビを見ながら思う。なんて中途半端な時間に起きてしまったんだろうと。夜中の一時だし、今から寝るにしても全然眠くないし、テレビはつまんなのしかやってないし。暇を持って余した俺は、運動すれば眠くもなるだろうと思いついてランニングに出かける事にした。

ここからなら高校まで行って帰ってくるくらいで丁度いい距離だしいい運動になると考え、目的地を高校に決め暗い夜の中を駆け出した。

夜中の高校とは俺が予想していた以上に不気味な光景だった。時折窓の合間から見える非常灯の赤い光がより一層恐怖を醸し出している。

「……あれ？」

高校の校舎の周りをぐるりと一周していると、窓の向こう側。校舎の中に人影が見えたような気がした。おいおいおい、勘弁してくれよそりゃ確かに夏だけだよ。幽霊とか心霊現象とか俺はそういうマジで駄目なんだよ。

そんなタイムリングを狙ったのかどうかは知らないが、アホなセミが一フレームだけ鳴き、俺は死ぬほど驚いたのは秘密だ。

俺が落ち着きを取り戻す前に、校舎の窓ガラスが割れる音が木霊した。暴走族！？ 暴走族か！？ それとも不良集団か！？ だが、辺りにはそれらしい集団はいない。どうして窓ガラスがいきなり割れたのだろうか。今、俺の選択肢は二つある。一つは速攻逃げる事。二つ目は学校の敷地内に入って原因を探る。さてどうしようか。

逃げるか。突撃するかだ。俺はふっと笑う。

「生徒会会長として、取るべき行動は一つしかないだろうな」

そう。俺のとるべき道は、三十六計逃げるにしかずだ！ 卑怯者とか腰抜けとか呼びたければ勝手に呼ぶがいい！ そうさ！ 俺は腰抜けだ！！

走り出そうとしたが右側で何かが動いたのを確認し、思わず右側を向いてしまう。

「へっ？」

その瞬間俺の身体は空中に浮かんでいた。何が起こったのかも理解できないうちに背中を壁に強打して、床に叩きつけられる。もし胃に何か食べ物を入れていたら逆流してそうだ。幸いにも夕食も食べていないから逆流はしなかったが。その代わりに胃酸は出たがね。

「何が・・・」

現在の状況を理解できていない俺の目の前にそれは現れた。

それはおおよそ生物と呼べるのかどうかよく分からない姿形をしていた。少なくとも俺は今まで目の前にいる理解不能生物を雑誌やテレビ。新聞では見たことがなかった。

人間の様に二本足で立っているが顔が無く、身体の至る所から無数に腕が生えている。そして青白く透明な肌(?)をしている。何この生き物。

「待て待て待て！ これは何だあれか！？ ドッキリテレビか！？ カメラ何処だ！？」

勿論返答は無いし。明らかに敵意向けてくるし。

「待て待て待て！ きつとあれだ話し合えば世界は平和に向かうさ！！ だから話し合いを」

人間のような身体から生えている無数の腕が伸びてくるのをリンボードダンスよろしく上半身を反らせて回避し、右側に飛び間合いを少し離すと理解不能生物はぎろりとこっちを見る。もっとも見たのが顔ならばだけだ。

「何君？ 誰君？ どっかで会ったっけ？ ああ確か遠い昔の物語に出てきた田中一号？」

どう考えても田中とは関係が無いと思うが、まあいいか。それよ

りもここからどうやって逃げ出すかだ。後ろは行き止まり。前には理解不能生物。右は柵がありこれまた結構な高さだ。左には、窓がある。その下には割れたガラスが散乱していた。

理解不能生物は俺に考える時間というものを与えたくないようで、身体から生えている腕がまたもや伸びてくる。

あんなので首絞められたら間違いなく死ぬし。俺は窓に手を掛け、校舎に飛ぶように入る。ガラスの破片で少しだけ手を切ってしまったが、そんなに深くはないし今は気にならない。暗闇の学校の廊下を全力で駆ける。四階へと上がり、また一階へと駆け下りる。最後の三段を飛んで降りると目の前には理解不能生物。どうやら先回りされているようだ。

「っち、どうやって先回り・・・ん？」

よく見ると理解不能生物の腕の一つが人体模型を握っている。

「不気味だ。まさかそれ武器か？ 攻撃力いくつよ」

俺の質問に答える事も無く問答無用で、人体模型をぶんぶん振り回し腕をびゅんびゅん飛ばしてくる。

「ああああ！！ 人体模型があ！！！！」

無残にもばらばらになっていく人体模型。

「おいこら！ 人体模型を粗末に扱う奴は人体模型に呪い殺されるぞ！ 田中一号！」

カタカタカタ。

後ろから妙な物音が聞こえてくるが、今は目の前の理解不能生物。長いUMAでいいか。UMAから目を離すわけには行かないし。

「つて、うお！？」

何か右足を掴み、体制を崩す。後ろを振り返ると人体模型の腕が俺の足を掴んでいた。

「おiiiiiiii！！ お前を粗末に扱ったのは、向こうだろう！？」

なんで俺を呪い殺そうとするんだよ！？」

急いで前を向くと、目の前には腕が迫っていた。避けることも出ずにランニング用のジャージを掴み、恐ろしい勢いで引っ張られ

る。

「くそつ。秘技！ 人間脱皮！」

引つ張る力を利用してスポットと上着を脱ぎ捨て、人体模型の腕を足で踏み粉々にして、踵を返して走り出す。三階へと駆け上がり、まっすぐな廊下を全力で駆け抜け直角曲がり角をなるべく速度を落とさずに抜ける。

「予想外です」

抜けた先の廊下に居た先客は本当に予想外だった。そのせいでなんだかカタコトみたいになってしまったじゃないか。先客はあのUMAのお仲間と思われるUMAにそれと戦っている舞衣だった。舞衣の手には日本刀みたいな刀が握られている。

後ろから追つ手のUMAが出現し、ぼんやりとしている暇は一秒たりとも無いようだ。

「舞衣！ 刀寄せせ！」

実は廊下の右側に刀が一本落ちていたのを見つけてはいたが、俺にも作戦というものがあつた。刀が落ちている場所は舞衣のすぐ後ろの地点だ。教室のドアの所に落ちていた。

舞衣は俺の方を向いて、つまりは敵に背を向けて刀を投げる。あまりにも無造作に投げたので刃の方を握ったらどうしようと思っただけ思つた。

敵のUMAにしてみれば背中を向けた舞衣を殺す絶好の機会だろう。だが、敵の腕が舞衣の身体に触れるよりも速く、刀で胴体を横から真っ二つにする。手応えは、まるで空を切っているかのようだった。

後ろを向くと、舞衣は左手で刀を掴み迫り来るUMAに斜め下から刃を振り上げ、斬る。同時にUMAの姿もどこぞへと消えていた。「死んだ・・・のか？」

「・・・どうしてここに？」

帰ってきた返答は俺が聞いた質問とは違うものだったが、舞衣がこうして口を開くという事は、敵は死んだのだらう。死んでないに

しても危険は無いという事だ。

俺はここに至るまでの経緯を俺なりに分かりやすく簡潔に話した。それを黙って聞いていた舞衣だが、俺の話が終わると俺と初めて会った日の瞳で大変分かりやすく言ってくれた。

「ここであつた事は忘れて。全てを忘れる事があなたにとって唯一の選択肢」

「せめて二択にしようぜ。あんな見たら気になって忘れられんわ。あれ何？ 田中一号？」

「……」

「お前、いつもここであんなんと戦つてるのか？」

「……今日はたまたまここになつただけ」

「ふーん。違う所に出る時もあるのか。」

「で、あれ何？」

舞は少しだけ考えて、

「田中一号」

とだけ言った。

二人で校舎を出ると、校門の外には数台のワゴン車と数十人の大人が待機していた。その中の若い男に見覚えがあつた。

「やあ、久しぶりだね」

「橘さん。もう出演する機会が無いのかと思つてましたけど」

「あはは。なんだいそれは」

周りの集団は何か怖いが、この人は何処か安心できる人だと俺は思った。

「舞衣もいつもご苦労様。今日はもう戻って休むといいよ」

「そうする」

「じゃ、俺はここで失礼するよ、さようなら」

早々に立ち去ろうとする俺を橘さんは呼び止める。

「何か用ですか？」

「あれの正体を知りたいは無いかい？」

そりゃ知りたい。だけど。

「舞衣は忘れろと言って、貴方は知りたいと言う。どういう事ですか？」

「そっか、舞衣は忘れろと言ったのか。珍しいな他人に忠告するなんて」

「あれの事何か知ってるんですか？ あなたも舞衣も」

「知りたいのかい？」

「当然だ。普通あれが何なのか知りたいと思うのが人間の好奇心だろう。だから俺はこう答えた「勿論です」と。」

第8話「すれ違う過去〜UMA〜」（後書き）

え〜。どうも作者の相沢であります。お読み下さった方。ありがとうございます。二話越してまた後書きを書かせてもらいます。え〜今回の話はコメディ&シリアスが同居しているような変な話ですが、どうかこれから先も読んで下さい。なるべく早く更新するようにします。では。

第9話「ターニングポイント〜真実へ〜」

橘さんに連れられて向かったのは用途不明の研究所みたいな場所だった。実は前にもここに来たことがある。あれは爆弾処理をした日のことだから二ヶ月くらい前だな。

建物に入ると広いロビーがあり、そこには受付のお姉さんが居た。橘さんはお姉さんと何か手短に話し通路の奥の方に歩いていく。俺も受付のお姉さんにお辞儀をし橘さんの後を追った。

エレベーターに乗り、地下へと降りていく。エレベーターから降りた先にあつた部屋は天井が高く広い部屋。まるで秘密基地みたいな印象を受ける。

秘密基地か。あながちそれも間違いではないのかも知れない。前にもここに来た事があるって言うてもこの場所には来なかつたし、以前に説明をされた舞衣のことについてもまだ隠している点も多いはずだ。

橘さんに案内された先の部屋は机にパソコンにソファといったオフィスのような造りの部屋だ。促されるままに俺はソファへと座り、橘さんはコーヒードリッパーが入った紙コップをテーブルに置き、向かい側に座る。

「コーヒードリッパーくらいしかなくて、すまないね」

「いえ。お気遣い無く」

コーヒードリッパーを啜るとブラックだった。苦いな。飲めなくは無いがどちらかと言えばあまり好きじゃない。

「さて、どこから話をしようかな」

「あの理解不能生物は何なんですか？」

「うん。あれはね言わば新人類になるはずだった者だよ」

「はっ？」

「これまた予想外だ。新人類だって？」

「つまりね、あれは人が行っていた新たな時代へと進む為の進化の

実験のために出来た怪物なんだ」

「新たな時代？」

「太古の昔から人は進化を遂げて文明を築いてきた。ならより高度な文明を築くのなら進化をしなければいけない。そう考えたんだらうね」

「進化した人は、今の人と何が違うって言うんですか」

「実験を行った研究者はこう考えた。僕達よりも遙かに優れた頭脳肉体。そしてもし超能力と呼ばれる特殊な力が実在したらと。第六感の秘密は脳に隠されていると聞いたことはないかな。脳はその一生を終えるまで十%くらいしかその力を使わないと言われてるね、脳の事は未だに不明な点が多いのだよ。でも、ゲノム。つまり遺伝子ならかなりの所まで研究が進んでいる。」

「遺伝子を独自の理論で改変すれば、新たな時代の担い手が造れると本気で考えていたんだらうね。宗教じみてるけど」

人の遺伝子を改変して、超能力をもたせるか。何か変だ。

「研究は途中で失敗して研究所は崩壊し多くの死傷者を出した。だが、その失敗で誕生したのが君が見たあの生き物だよ。本来ならば一体だけのはずだったのだが繁殖しているのか、正確な数は分からない。あれが人に危害を及ぼす前に殲滅する為に結成されたのが僕達の組織」

「まるで、秘密組織ですね」

「その通り。僕達は誰にも誰に知られる事も無く、全てを終わらせなくてはいけない。舞衣にはその為に無理を強いてしまっている。」

今日の出来事から見ても、君なら舞衣の助けになれる。どうか君の力を貸してくれないか」

分からない点が多い。いや、不透明な点が多すぎる。確かに今の橘さんの話で納得出来るかもしれないが、何処かおかしいような気がする。だが、そんな事は気にしても仕方が無いことか。でも、これだけははっきりさせておきたい。

「舞衣はどうしてあなた達の為にあんな化け物と戦うんですか」

「それは、以前君に説明した理由からだよ」

そうか。あくまでその点については本当の事を言うつもりはないんだな。なんとなく橋さんが本当のことを言っているとは思えないま、俺の直感ほど当てにならないものはないからな。

それに今は、舞衣と一緒にあの化け物を退治している時間はなさそうだしな。彰が言っていたことが気になる。俺の記憶している過去と真実は何処か食い違っているのだから。調べてみる必要がある。彰が言っていた事が本当なのかどうかを。

「今は他にすべき事があるので」

「そうか」

「どうして俺にあの化け物の事を話そうと思ったんですか」

「実物を見られているのに隠し通す事は、君の記憶を消去するしかないからね」

さらっと凄い事を言うなこの人は。それになんだろうこの嫌悪感と寒気は。

秘密組織の基地から外へ出ると、既に太陽が昇った後だった。今日は忙しい一日になりそうだな。

「計画は順調ですか？」

一人の老紳士が椅子に座っている橋に問いかける。その問いに橋は冷笑を浮かべながら答える。

「ああ、やはり運命というものは存在するのだな。彼は運命の歯車の一つとなって動き始める。計画通りだ」

辺りが暗くなり始めてきた。商店街の時計を見ると六時半を指している。今日一日和也にも協力してもらって色々調べたが、警察で

もない一人の高校生では限度がある。成果はあまりなかったが。全然なかったともいえない。やはり彰の言っていたように俺の記憶と現実ではかなりの相違点があると言う事だ。こればかりは流せる問題ではない。俺はどうして記憶違いをしているのだろうか。

確か人は受け入れる事が出来ないほどのショックに見舞われると、自分の記憶を改変させてしまうとは誰かが言っていたような気がするが、俺の場合は桜は死んだ。と言うことを覚えていないのではなく、桜が死んだ日が現実と食い違っているのだ。そういう事もあり得るのだろうか。それに俺が行方不明になっていたと言うのも気に掛かる。何処で何をしていたのだろうか。

ふと一つの仮定を思いつく。それはとんでもなく馬鹿な話で漫画みたいな仮定だ。だが、万が一の可能性で俺の記憶が何者かの手によつて故意に改ざんさせられていたとしたら、どうだろう。

「馬鹿馬鹿しいか」

そろそろ、家に帰らないと妹の雷が落ちてきそうだな。ぼんやりとそんな事を考えていると目の前の小さい子供が握っていた風船が突風によつて空へと昇って行く。風に驚いて紐を離してしまったのだろう。飛んでいく風船を見つめていた俺は、一本の木に目を留める。

小高い丘の上に一本の木がここからでも空に向かって伸びているのが分かる。家に帰る前にあの場所に行つて見たかった。桜が死んでから一度たりとも行っていないあの場所に。

そこは街が見渡せる山の中腹に広がる広場だった。桜の木が一本だけ植わっていて、春には綺麗に咲き誇っていた。小さい時は桜とよく一日中過ごしていた。俺達だけの秘密基地。

「よお、久しぶりだな」

そこに誰かが居たわけでもない。俺が久しぶりと言ったのは桜の木にたいしてだ。六年間も来ていないのに、丘の風景はあの時とそんなに変わりがなかった。

「静かだな」

独り言だけがはつきりと俺の耳に届く。そのほかの音と言えば風で木が揺れる音くらいしか聞こえない。静かな場所だ。

そういえば、桜の木の下に桜と一緒にタイムカプセルを埋めていた事を思い出す。あれは確か、小学五年生の春の出来事だったかな。埋めた桜の木の下を地面を見ると、一度掘り返されたような跡があった。近くの場所には小さいスコップが落ちていた。

これで掘れって事かよ。小さなスコップを手に土木作業にいそしむ事しばらくして、タイムカプセルを掘り返した。こんなに小さい箱だったかなと思う。子供の頃は大きい箱だと思っていたんだけどな。

箱を開けると、中にはビデオテープと手紙だけが入っていた。

勝手にタイムカプセルを開けてしまった事をまず詫びます。ですが。

そんな一行目から始まっていた手紙を読み進める内に、俺は震えているのが分かった。そこには真実が書かれていた。俺の知り得ない、だが確かな真実が。手紙を読み終わった俺は、急いで手紙を箱に戻し、その箱を持って家に帰ろうとする。

立ち上がり、歩き出した俺の目の前に一人の少女が現れた。何時からそこに居たのだろうか。まったく気づかなかった。

「悪いな今は急いでいるんだ

「さようなら。せめて安らかな

死を。

俺が聞き返す暇もなく、少女は刀を俺に向かって投げる。条件反射的にそれを掴んだ瞬間には目の前には刃が迫っていた。刃を鞘を抜いていない刀で受け止める。だが、人とは思えないほどの力で俺の身体ごと吹き飛ばした。

吹き飛ばされた俺は、丘から落ちた……。

舞衣。どうしてお前が？ 電源を落とすように俺の意識も途絶えた。最後に見たのは、丘の上から俺を見下ろす舞衣が、月明かりに照らされて泣いていた様に見えた。

あれ？ 暗闇だ。ここは何処だろう？ 遠くで誰かが呼んでいるような気がする。誰だろう？学校の先生かな？ あれ？ じゃあ今授業中？

「……………い！……………なさい！！」

授業中だったらさっさと起きないと。

「さっさと起きなさい！この寝ぼすけ！」

突然俺の腹部に凄まじいまでの衝撃と痛みが走り、俺は地面を這い回る。当然目は開けられない。

「ようやく、目を覚ました？寝ぼすけ君」

こんなんで目が覚める訳ないだろう！ いや、目は覚めるけど、もっとマシな起こし方をしろよな！ と叫んでやりたいが声すら出せない。何とか目を開けて、俺を攻撃した奴を見る。そこに居たのは、長い黒髪に整った顔立ち。何故か勝利を確信しているかのようには笑っている少女の姿があった。見覚えがあるようなないような。

「おはよう、寝ぼすけ君」

にこやかに朝の挨拶をしてくる少女だが、俺は混乱していた。

「ここ何処？ 君誰？」

「少し強くやりすぎたかな？ じゃ、もう一度」

構える少女。恐らくあの構えからは回し蹴りが来そうだな。今度は頭を狙って。

「おいしい！！ 何冷静に説明文言ってんだよ！ 待て待て待て！ 俺は至って正常だし、ここは平和的に話し合いで解決しようではないか！」

「じゃあ、ここは何処で。私はだあれ？」

「ここは……………何処だろう？ 君は……………誰？」

当然回り蹴りで吹き飛ばされた事は言うまでもない。だって、本
当に知らないものは知らないだもん。しょうがないじゃないか。
暴力反対平和主義だし、いきなり蹴りだし、でも何処かで見事あ
るような気がするし。ようやくはつきりと目が覚めてきて、ここが
何処かは分かってきた。とある旅館の一室。そう、ここは旅館「水
島」だ。

「記憶戻ってきた？」

「普通、飛ぶと思うぞ逆にさ。ここは旅館「水島」か？」

「そうだよ」

「そして、君は死神か」

「もう一回と」

物騒極まりないことを言うな。

「冗談だって、坂上桜」

「どうしてフルネームなのよ、創野誠之君そらのまこと」

そうだ。思い出した。俺達は今映画の撮影に来ているんだった。
部屋にはもう俺と桜しかいない。もう皆起きて活動しているのだろ
う。

「この部屋凄いな。布団はぐちゃぐちゃだし。色々な物転がってる
し」

「男共のタコ部屋って言ったらこんなものだって」

「それよりも早く行こう。もう撮影始まってるし、急がないと」

差し伸べられた手に掴まって俺は立ち上がる。二人で外に出ると、
太陽が容赦なく照り付けてくる。セミの合唱が聞こえ。目の前には
青い海が広がっていた。

撮影場所の石原高校に行くと、当然の事だが皆揃っていて、撮影
を開始していた。それから午前中の撮影を撮り終え、午後も少しだ
け撮影をしてから今日はお終いとなり、役者以外のスタッフは全員
海へと直行する。まったく酷いやつらである。と言う訳で役者陣は
花火でもやるうと言うことになった。

買いに行くのをジャンケンで決めたのだが、チョキにパーで果敢

に立ち向かった俺は見事、花火の買出しを任される。一人とぼとぼと歩いていると、桜に声を掛けられて俺が花火を買いに行くと言うと、一緒に買いに行くと言って一緒に歩き出す。

スーパーに着いておびただしい数の花火を買い漁る俺に桜は半ば呆れていたようだった。

「凄い量。持って帰るの大変そう」

「根性だ」

二人とも両手にビニール袋一杯の花火を持って凱旋帰還した。それから大勢で花火をして騒いだ。何時の間にか海へと行った奴らも合流して皆ではしゃいだ。バケツが一杯になったので、また別のバケツに水を入れに海へと向かう。

「にしても、買い過ぎたかな、まだまだ残ってる」

「・・・何時までここに居るつもり？」

「そうだな、さっさと水を入れて戻ろう」

歩き出して気づく。舞衣が歩く事もなく俺を見つめている。俺は舞衣に駆け寄った。何処か痛めた所でもあるのだろうか。

「どうした？ 早く戻ろうって言ったのお前だろ。もしかして何処か痛いのか？」

「あなたはここに居るべき存在ではない、だから何時までここに居るつもり？」

「なにを・・・？」

「そう、君はここに来るにはまだ早すぎる」

桜の声が聞こえ。振り返るとそこには桜が立っていた。

「ここは、あなたにとって理想の場所」

「でも、君はまだここに来てはいけない、まだ君を」

「大切に思っている人がいるから、まだ」

「君は求められているから」

舞衣と桜の声が重なって聞こえてくる。錯覚だろうか。

「さあ帰ろう、君の居るべき場所に」

桜が手を差し伸べてくる。俺はその手に掴まる事を躊躇う。

「どうしたの？」

「躊躇う必要なんかない」

「ここは」

「まだ君の居るべき場所じゃない。でも」

「どうしても言うのなら、ここであなたを殺す。あの時のように」

「さあ、選んで。ここでの死か生きて」

「全ての真実を知るかを」

俺は、真実を知りたい。

「俺は……」

差し伸べられた手にしっかりと掴まる。

目を覚ました俺は病院のベッドの上に寝ていた。右腕に点滴が打たれているらしいという事はわかった。なんだか身体全体がだるい。「目を覚ました！？ 私が誰だかわかる？」

近くで誰かが叫んだ。俺を見下ろしている少女が叫んでいるのだろつか。泣いていたのか目が赤くはれている。

「さくら……いや美咲か？」

「良かった、本当に良かった」

「泣いてるのか？」

「たった一人の家族なんだから、心配させないでよお兄ちゃん」

「ごめん……」

第9話「ターニングポイント〜真実へ〜」（後書き）

え〜どうも相沢です。何とかここまで書き進めましたが。なんだかコメディとはかけ離れて行ってますね。それでも一応コメディです。と言い張ってみたいものなんだかなあといった展開です。と言う訳で（どんな訳よ）勝手に今回の話はコメディ物語のシリアス部門（意味不明）にしたいと思えますのでどうか宜しくお願いします。あ、シリアス編の方がいいかな。と言う訳で（だからどんな訳だよ）お読み下さってありがとうございます。続きもなるべく早く更新したいと思います。

番外編「作戦会議」にもならない」

「今日ここに集まってもらったのは他でもない！」

「なにになに？」

「俺たちも忙しいだけどね」

「気になるね、舞衣」

「……うん」

「本線とは全く関係がありませんが！ 路線変更に次ぐ路線変更でなんやら訳のわからん事になりそうなのでこの辺で修正を施そうかと思えます！」

「……おお……」

「つてな訳で、アイデアある奴拳手！」

「はい！」

「元気がいいなあ、はい田園コンビ！」

「やっぱりあれだよ。ロボだよロボ！ロボ出そうぜ！」

「ロボねえ？」

「ロボの暑い戦いこそが少年のハートをがっちり掴むんだぜ！」

「暑い漢字間違ってる。それにロボだめ」

「じゃああれは、主役交代！」

「誰に？」

「それはもちろんお・れ・た・ち」

「悪いな、ホモ路線に持ち込む予定は無いから」

「皆さんそんなんじゃ駄目なんですよ！」

「お、悠子さんなんか案あるの？」

「勿論です。とりあえずVTRスタート！」

とある平凡な高校に突如宙から悪の大王が舞い降りた。大王は世界を征服しようとしたくらむが、それを阻止するべく高校生が一斉蜂起した。悪の大王が放ったモンスター達を人類の科学の結晶（主に戦車とかロケットランチャーとか火炎放射器とかロケットランチャ

「とか」で薙ぎ払い、ついに悪の大王を討ち世界を救うのだった。

「なんてシナリオどうです？」

「いや・・・なんて言うか、途中で物騒な発言が・・・」

「というか何処から、戦車やらロケットランチャーを持ち出すんだつての、一高校生じゃむりにきまって・・・あ」

「舞衣。田園コンビさんを体育館裏まで丁重にお連れして。くれぐれも粗相のないように」

「わかった」

「あ」

「俺達用事が・・・」

「逃がしませんわよ？」

「さて、うるさい奴らが消えたが、何か案あるかねユキ」

「そうだね、ここはチビツ子のために戦隊物のパロディなんてどう？」

「チビツ子小説読むかな」

表向きには何処にでもいる高校教師。しかし！ その実態は悪の組織から世界を守るスーパーヒーローなのだ！

「その名も、先生戦隊ゴレンジ」

「却下。何か危なそうなの却下、絶対却下」

「路線変更なら当然私達の出番が増えるのよね？」

「佳織か、何かアイデアあんの？」

「今の時代に求められているのは、意外性よ意外性！ ゴットオブ意外性」

「その通り。意外性を制するものはコスモ（宇宙）を制する！」

「意外性ねえ？ 一気に殺人事件とか？」

「殺人事件となー！？ ならば俺が出なくてどうするね！？」

「どっから沸いて出たあんたは」

「推理ものこそ今の時代の最新鋭。俺が主役で決まりだろう！」

とある朝、いつもどおりに学校に登校した俺の目に飛び込んできたのは、変死体だった。そしてその変死体は親友創野だった。変わ

り果てた親友の姿に絶望の淵に追いやられる俺。だが。時を同じくして、舞衣と悠子までもが連れ去られてしまう。今巨大な陰謀が音を立てて動き始める！

「というのはどうだね？」

「ありえないんだよ。却下な」

「どこら辺がだよ!？」

「やっぱりロボ出そうぜ!」

「どこから出てきた田園コンビ」

「いえいえ。やっぱり青春物ですよ、ねえ舞衣」

「……うん」

「青春に戦車とかいらんわ!」

「戦隊物は?」

「意外性よ意外性!」

「やはり推理だろう!？」

「まあ、あれだな。こいつらに意見を募った俺が馬鹿だった。と言
う訳で俺が考えよう」

次回で最終回だなこりゃ。

ターニングポイント

番外編「作戦会議ー」にもならない」(後書き)

勢いだけで書いてしまいました。次回で最終回のようです。

最終話「プロローグ?」名譽監督」

聞くところによると俺はビルの四階に相当する高さから落ちたらしい。普通なら死んでもおかしくないそうだが、俺は生き延びている、こういう事を奇跡とでも言うのだろうか。見舞いに来た和也と田園コンビがいるときにふと呟いたら同じ答えが返ってきた。「人生における全ての運を使い果たしたな」だそうだ。大きなお世話だ。それにこっちはまだ、終わらせなければいけない大仕事が残ってるんだからな。運を使い果たしていたら間違はなく死ぬぞ。それでもいいのか主人公死んだら終わるぞこれ。まだ完治もしていないのに病院抜け出したりしてたら死ぬか、いや後で美咲にでも殺されそうだ。

「・・・それもいいか」

「今日退院でしたか誠之さん」

病院の玄関で思わぬ人物に遭遇した。今までお見舞いにも来ていなかったのに。

「今日退院です」

「そうでしたか。花束無駄になったかな？」

「もらっておきますよ、悠子さん」

「そうですか」

「そうなのです」

「もう行きますね。さようなら」

背中を向けて歩いていく悠子さんを呼び止める。悠子さんは意外そうに振り返る。

「また、明日」

「ええ。また明日」

さてと脱走した事がばれる前に、ここをずらかるかな。

全く。丘の上から落ちるなんて、一体何やってたんだか、大体に

して普段からボーとしてる事多いんだから、そんな場所で危険だとは考えないのかなあの人。それにしても少しお菓子とか買い過ぎたかな？ いくらなんでもこの量は。大丈夫か。病室のドアを開けた私が見たのは、風に揺られている無人のベットだった。重い足取りでベットに近づいてみると、一枚の置手紙が残されていた。

『美咲へ。キャバクラなるものに行つてくるので心配無用』
「アホか？」

こんなアホな手紙。紙飛行機にして何処まで飛ばしてやろう。その心に誓った。私。川崎美咲かわさきみさき十六歳の夏の日。

寒いと思つたら雪か。もうそんな季節なんだなあ。

「季節は思いつきり夏だけだね」

「君がいつまでも過去に囚われたままだから冬なんだよ」

分かつてるようどせ、幻覚だつて。この雪も寒さも全てな。

「僕は幽霊なんか信じないし、居るわけが無い。君が振りかざしていた持論だつたね」

「今でも信じてなんかないけどな」

「信じられる事があるのはいいいことだね」

信じられないことだらけよりも、信じられる事だけがあることはとても良いことだと、その声は言うけど、僕は別にそうは思わないけどね。

「過去にも裏切られ、全てに裏切られてもなお君はどうしてそんなに能天気でいられる？」

「僕は過去に裏切られてなんかいない」

「それは君が……」

「本当の過去を知らないから。とでも言いたいのかな田中一号（改）君」

捉えた。

間違いなく木刀の切っ先が田中一号を切り裂いた。今まで何も見

えていなかった場所に以前学校の校舎で戦った田中一号が出現する。
「ばかな・・・」

「光の屈折でステルスになれるまでは良いんだけど、喋り過ぎたね。
ご愁傷様」

もつともあの田中一号が喋れるとは思わなかったけどね。いや、
田中一号（改）だから喋れるのかな。

「あの時、お前らは僕の目の前で大切な人を奪って行ったな。無力
な自分が憎かった。記憶を消されても、それだけは覚えていたんだ
ね。僕はあの後傭兵家業を生業としている父親から、人を殺すため
の技術を教わったんだよ。僕が真実の過去を取り戻して君たちを殺
すためにね」

「二重・・・人格か」

「その時が来たまでだよ。僕を生み出したのは他でもない君たちだ。
でもね、造物主は創造主を殺して自由になりたいと思うんだよ」

さて、もう夜だ。全てが黒に染まっていく闇の中。幕引きには丁
度良い時間帯だ。全てを終わらせるために僕は歩き出す。目的地は
最初から決まっている。用途不明の。いや、人体実験を行っている
研究所に僕は行く。例えそれが誰かに決められた運命でも。運命だ
からこそ行くのかもしれない。だって、二ヶ月くらい前に運命説な
んか説いたら地面の下に埋めてやるって言ったんだもの、主人公た
るもの有言実行は当然でしょう。

「ふう、今ので十か。全くこんな事ならバイクにでも乗ってくれば
良かったな。徒歩だと思っただけ行く手を阻みやがって田中一号が」

よくもまあ、次々と生み出す物だな。やつら科学者にとって人の
命はごみ同然か。いや、替えの効く道具とでも言う所か。何が世界
を守る秘密組織だ。自分達で造ってるんじゃないか、この田中一号
を。

「やあ、舞衣。わざわざそんな所で待ってたの？」

「・・・真剣は？」

「ないよ、僕は別に人を殺したくて来たわけじゃないしね。正直な

話・・・いやいいか。ま、とにかく僕は木刀で戦う」

刀を舞衣は下段に構える。僕は中段に構えた。さて、この場合によると構えによる不利は関係あるのだろうか。さてねそれはどうだろう。

下段からの振り上げの太刀筋を木刀で受け止める。この際その木刀どんな材質で出来ているのとは聞かないように。それから三、四回打ち合い、互いに間合いを離す。というよりも舞衣が後ろに跳び退いて、間合いを離れた。

「何の為に戦う？」

「そういってお前は何なんだよ？ 何の為にこんなことしてるんだよ」

「何の為でもない。ただ・・・」

風が吹くと共に、舞衣の姿が消える。人が左右の動きで姿を消せる訳は無いので、恐らく上だと判断し、上からの振り下ろしに備えて木刀をで受け止めようとす。だが、上には舞衣はいなかった。ただ満月の月が夜空に浮かんでるだけだ。

「そういえば、お前そういうの得意だったよな」

「どれだけ、強くても。それは所詮人間の常識、剣の達人。柔道の達人。空手の達人も全ては人の常識の限界。でも、私は違う」

首筋に刀を当てられた、俺は振り返ろうとはしない。後ろから刀を首筋に当てている舞衣は相も変わらず無表情かな。そういえば、なんで月ってうさぎが餅つきしているって言われるようになったんだろうね、全然見えないのに。今は関係ないけど。

「君は兵器でしたね。人の素晴らしい進化の先にある未来。新人類とでも言うんですか？ その未来を視る事が出来る力にとても常人とは思えないほどの反射神経、動体視力。その力こそが人の欲しかった未来ですか。その為に多くの命を犠牲にして？」

「・・・」

「まだ犠牲の途中ですけどね。君は生まれる前から遺伝子を変えられ先天的に。そして僕は後天的に遺伝子を変えられた存在。言わば僕も君もただの実験体なんだよ、そして君は兵器じゃない、兵器の

君が何故今躊躇う？ 何故殺さない、それは君が……え〜と？
君が……。

「っこの！ スカポントン！！」

「いてえ！」

突然横から国語辞典を投げつけられる。丁度辞典の角が僕の頭にジャストミートしてぐりぐりえぐり込むようなスピンドで回り続けている。シューとでも煙が出そうな勢いなんですけどね、あれですか火起こしですか？ 人の頭で火起こしって人類初だよ！

「カット！ あんたねえ一体何回本番で間違えば気が済むの！？」

「だから前々から言っているだろう？ 長々しい文は覚えきれないって、シナリオ書いたシナリオライターに文句を言っただけいいね」

大体、こっちにしてみてもクジ引きで決まった主演の座なんてもうポイっとして、自由にしてみてもクジ引きで決まった主演の座なんてもうポイっとして、自由に楽しい夏休みを謳歌してみたいものだ。大体にして文化祭で公開する映画なんか作ってどうするつもりなのかね、この部長さんは？ 僕達は確か新聞部のはずだが。

「ああもう！ だれよこいつに主演のクジ引かせたの！？ 撮影が進まないっいたらありやしないのよ！」

「とうかさ、何か後半急展開過ぎないか？ なんか病院で目を覚ました後の創野って何でも知ってる事になってるし」

「うるさい！ もう時間の余裕がそんなに無いのよ！！ 大体三分分って頼んだのに二時間分もあるシナリオ書くって嫌がらせ！？」

確か小説研究部のやつらに無理言っただけで徹夜で書かせたんだっけな。そりゃ嫌がらせもしたくなるだろうな、二時間分のシナリオをこいつの独断と偏見を持ってカットしてカットして縮めた結果。今回のような歪なシナリオが出来上がってしまったんだな。うむ、恐ろしい。

「あはは”ユキ君”も連日の撮影で疲れてるんですね、少し休めばきつと大丈夫ですよ」

僕と映画監督の間に入ってきたのは、河上舞衣さん。劇中では無口キャラで通ってるけど、実は正反対の性格だ。劇中というなら橘

悠子かな。というか僕以外ほぼ全員実名で出してるって凄い根性してるよな。

「駄目よ舞衣ちゃん。この手のアホは甘やかすと凶に乗るから」

「何を言う、僕は褒められて伸びるタイプなんだよ。さぁもつと僕を褒めろ」

「さつさと配置に着く！ さつさと撮影再開するわよ！」

シカトかよ！ 僕の事シカトするなよな全く。

「いい？ 次で終わらなかつたら打ち首！」

何時の時代の人間だお前は。戦国時代か、戦国大名気取りか。

「はいはい。分かったよ」

「テイク189！」

撮影現場に名誉監督の声が響き渡った。

（ F i n ）

最終話「プロローグ?」名譽監督」(後書き)

今回で最終話です。最後までお読み下さり大変ありがとうございます。凄くアホな終わり方で大変申し訳ありません。ゴットオブ意外性を求めた結果のような成れの果てではありますが、最後までお付き合ひ下さって大変ありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7448b/>

ターニングポイント

2009年7月3日19時01分発行